市内遺跡 7

――平成23・24年度 埋蔵文化財発掘調査報告書――

2014.3

茅野市教育委員会

市内遺跡 7

――平成23・24年度 埋蔵文化財発掘調査報告書――

2014.3

茅野市教育委員会

序　文

茅野市は長野県南東部に位置する風光明媚な高原都市です。東に八ヶ岳連峰、西に赤石山脈から続く山脚、北に霧ヶ峰山塊を擁し、霧ヶ峰の南麓からは遠く富士山を望むことができます。

当市には特別史跡尖石遺跡、史跡上之段遺跡や駒形遺跡をはじめとする多くの縄文時代の遺跡があり、「縄文の里」として全国にその名を知られています。また、それらの縄文遺跡にかくれがちであった弥生時代から江戸時代の遺跡も、市街地周辺における近年の発掘調査によってその数を増しています。

当市では市内各所で行われる各種開発事業と遺跡の保護・調整を図るために、国庫補助事業による試掘調査ならびに本調査等を進めてきました。その中で平成23年度から24年度に実施した16件の調査成果が本報告書にまとめられています。

報告する発掘調査は、いずれも遺跡の一部を対象に行われた小規模なものですが、このような調査を地道に繰り返し行うことで、遺跡の広がりやその性格が解き明かされていくものと期待されます。

最後になりましたが、発掘調査にご理解とご協力を賜りました地権者ならびに事業関係者の皆さま、調査に従事された作業員の皆さまに心からお礼を申し上げます。

平成26年３月

茅野市教育委員会
教育長　牛　山　英　彦

例　言

1　本書は長野県茅野市が平成25年度に国宝重要文化財等保存整備費補助金を受け作成した、平成23・24年度の各種開発事業に伴う市内遺跡発掘調査報告書である。

2　本書に掲載した調査は、平成24年３月７日から平成25年３月29日までに実施した調査である。

3　整理作業ならびに報告書作成は、平成25年12月２日から平成26年２月28日に実施した。

4　各遺跡の所在地は本文中に記した。

5　本調査に係わる出土品、諸記録は茅野市尖石縄文考古館で収蔵・保管している。

6　発掘調査から報告書作成までに、長野県教育委員会事務局文化財・生涯学習課、長野県考古学会、諏訪考古学研究会の諸氏からご指導、ご助言を頂いた。記して感謝する次第である。

凡　例

1　本書における挿図の縮尺は、挿図中に記している。

2　挿図における遺構の略号は以下のとおりである。

①１号住居址 → １住　②１号竪穴状遺構 → １竪穴　③１号土坑 → １土　など

3　土層断面図のレベルで未記入のものは、地表面のレベルを基に任意で設定している。

4　本文と写真図版に示した略号は以下のとおりである。

①　平成23年度試掘調査の１ → 23試－１

②　平成24年度試掘調査の１ → 24試－１

③　平成23年度本調査および工事立会の１ → 23－１

④　平成24年度本調査および工事立会の１ → 24－１

目　次

第１章　市内遺跡発掘調査等事業の概要……1
　第１節　茅野市における埋蔵文化財保護の概要……1
　第２節　平成23・24年度事業の概要……1
　第３節　調査の体制……2
第２章　試掘調査……5
第３章　本調査および工事立会……12
写真図版
抄録

第１章　市内遺跡発掘調査等事業の概要

第１節　茅野市における埋蔵文化財保護の概要

平成26年３月現在、茅野市における周知の埋蔵文化財包蔵地（以下、遺跡とする）は348箇所である。遺跡内およびその隣接地で開発行為が計画された場合、事業者と市教育委員会との間で埋蔵文化財保護に関わる取り扱いを協議し、試掘調査（確認調査）の実施を基本に埋蔵文化財（遺構・遺物）の有無を確認することにしている。埋蔵文化財が確認された場合、工事の計画変更による遺跡の現状保存を事業者に求めているが、やむを得ず失われる場合には、事業者の協力を得て本調査による記録保存を実施している。

近年の当市における発掘調査等は、ほ場整備・土地区画整理・幹線道路新設事業などの公共性の高い大規模な開発に伴うものから、宅地造成・集合住宅建築・個人住宅建築工事などの民間・個人が事業者となる小規模な開発に伴うものへ移行している。今後も人口の増加と相まって、このような小規模開発に伴う調査は増加の一途を辿ることが予想される。これに対処するため、市教育委員会では埋蔵文化財の保護・保存に対する理解と協力を得るためのさまざまな事業を展開してきた。平成18年度は『遺跡位置図』を掲載した埋蔵文化財の取り扱いに関するリーフレットを市内全戸に配布し、保護・保存に関する啓蒙・普及活動を行った。平成19年度は周知の遺跡の範囲を全面的に見直し『遺跡位置図』を改訂した。平成20年度は遺跡の位置と内容の周知化をさらに進めるため、『遺跡位置図』ならびに『遺跡台地』を電子化し、茅野市ホームページ上での公開を開始した。また、こうした取り組みにあわせて、平成19・20年度には市内の不動産取引業者、土木および建設業者、建築設計業者と埋蔵文化財の取り扱いに関する勉強会を合同で開催し、遺跡の位置や遺跡内で工事を行う際の法的手続きなどを相互で確認した。この他、地域の歴史を直に感じていただく機会として、市民対象の発掘現場の現地説明会を開催している。

平成23年度に米沢地区北大塩に所在する国史跡駒形遺跡で保存目的のための確認調査を実施したが、平成24年度も同様の調査を実施した。史跡指定地の北側近接地（民有地）を対象に調査を行い、縄文時代中期前半と後期前半の集落の一部を確認した。２ヶ年にわたる確認調査で、史跡指定地から続く縄文集落の範囲や内容が明らかとなり、これまで指摘されてきた「時期により地点を変えながら集落が営まれる」姿をよりはっきりと示せるようになった。こうした調査の成果は、過去の調査成果とあわせて、平成25年３月に『駒形遺跡確認調査報告書』にまとめたところである。

第２節　平成23・24年度事業の概要

平成23年度に受理した『土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書（93条第１項）』ならびに『土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知書（94条第１項）』は43件である。この中で平成23年度国宝重要文化財等保存整備費事業補助金の「市内遺跡発掘調査等事業」の対象事業は、試掘調査が５件（内１件を本書で報告）、本調査および工事立会が14件（内１件を本書で報告）、補助対象事業費が3,800,000円であった。なお、この事業費の中に保存目的のための駒形遺跡確認調査事業費が含まれている。

平成24年度に受理した『土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書（93条第１項）』ならびに『土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知書（94条第１項）』は37件である。この中で平成24年度国宝重要文化財等保存整備費事業補助金の「市内遺跡発掘調査等事業」の対象事業は、試掘調査が３件、本調査および工事立会が11件）、補助対象事業費が3,083,000円であった。なお、この事業費の中に、平成23年度に引き続き実

施した保存目的のための駒形遺跡確認調査事業費が含まれている。

第３節　調査の体制

発掘調査は茅野市教育委員会事務局 尖石縄文考古館（平成23年度）および文化財課（平成24・25年度）が実施した。組織は下記のとおりである。

①調査主体者　牛山英彦（教育長）

②事　務　局　小池沖麿（教育次長　平成24年３月31日まで　生涯学習部長　平成24年４月１日から）

③尖石縄文考古館　（平成24年３月31日まで）　文化財課（平成24年４月１日から）

鵜飼幸雄（尖石縄文考古館長　平成24年３月31日まで　文化財課長　平成24年４月１日から）五味　仁（考古館係長　平成23年９月30日まで）功刀　司（考古館係長　平成23年10月１日から平成24年３月31日まで）中村浩明（考古館係長　平成24年４月１日から）守矢昌文（文化財係長　平成24年３月31日まで）小林深志（文化財係長　平成24年４月１日から）柳川英司（平成24年３月31日まで）山科　哲　大月三千代（平成25年３月31日まで）塩澤恭輔（平成25年４月１日から）守矢美空（平成25年４月１日から）小池岳史

学習企画課　小林健治（平成24年３月31日まで）

生涯学習課　守矢昌文（生涯学習係長　平成24年４月１日から）

④調 査 担 当　小林深志（発掘調査担当）小池岳史（発掘調査・整理作業・報告書担当）

⑤発掘調査参加者

補　助　員　牛山矩子　武居八千代

作　業　員　宮坂　功　柳沢省一　酒井みさを　大勝弘子　立岩貴江子

年度別調査一覧表

平成23年度 試掘調査

報告番号	遺跡番号	遺跡名	所在地	開発事業名	調査面積(㎡)	調査期間	写真図版番号	備考
1	245	山田畑	茅野市玉川3350-9	道路	30	平成24年３月７日	図版１	23試－１

平成24年度 試掘調査

報告番号	遺跡番号	遺跡名	所在地	開発事業名	調査面積(㎡)	調査期間	写真図版番号	備考
1	110	家下	茅野市ちの2574-1ほか	宅地造成	6	平成24年７月11日	図版１・２	24試－１
2	143	御社宮司	茅野市宮川5865-3	集合住宅	8	平成24年10月10日～15日	図版２	24試－２
3	224	上原城下町	茅野市ちの1222-1ほか	宅地造成	8	平成24年８月29日～30日	図版２・３	24試－３

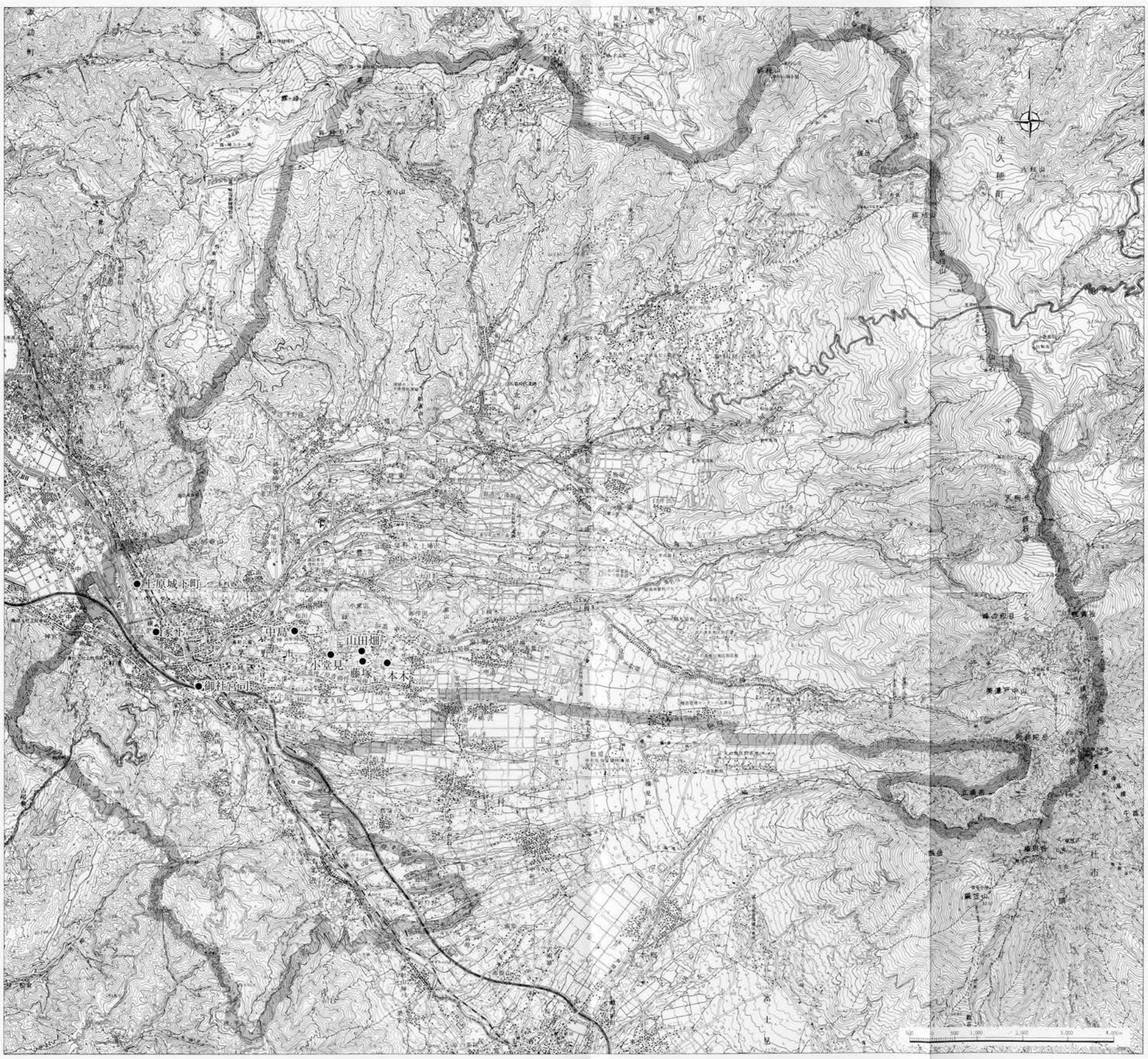
平成23年度　本調査および工事立会

報告番号	遺跡番号	遺跡名	所在地	開発事業名	調査面積(㎡)	調査期間	写真図版番号	備考
1	224	上原城下町	茅野市ちの1768	個人住宅	1	平成24年３月28日	図版３	23－１

平成24年度　本調査および工事立会

報告番号	遺跡番号	遺跡名	所在地	開発事業名	調査面積(㎡)	調査期間	写真図版番号	備考
1	110	家下	茅野市ちの285-4	個人住宅	2	平成24年９月25日	図版４	24－１
2	143	御社宮司	茅野市宮川5858-3	個人住宅	2	平成24年10月２日	図版４	24－２
3	160	小堂見	茅野市玉川3240-3	個人住宅	5	平成24年７月26日	図版５	24－３
4	162	藤塚	茅野市玉川3580-1	個人住宅	37	平成24年４月12日～５月14日	図版５・６	24－４
5	163	一本木	茅野市玉川8428-1の一部	個人住宅	46	平成24年11月27日	図版６	24－５
6	224	上原城下町	茅野市ちの697-2ほか	個人住宅	42	平成24年７月27日～８月21日	図版７・８	24－６
7	224	上原城下町	茅野市ちの1037-4	個人住宅	2	平成24年11月９日	図版８	24－７
8	224	上原城下町	茅野市ちの703-2ほか	個人住宅	23	平成24年12月24日～平成25年２月４日	図版８～10	24－８
9	224	上原城下町	茅野市ちの1037-3	個人住宅	2	平成25年２月６日	図版10・11	24－９
10	224	上原城下町	茅野市ちの1221-12	個人住宅	2	平成25年３月14日	図版11	24－10
11	246	中島	茅野市玉川1358ほか	個人住宅	140	平成24年８月21日～23日	図版11・12	24－11

平成23年度事業は『市内遺跡６』(2012) で未報告のもの



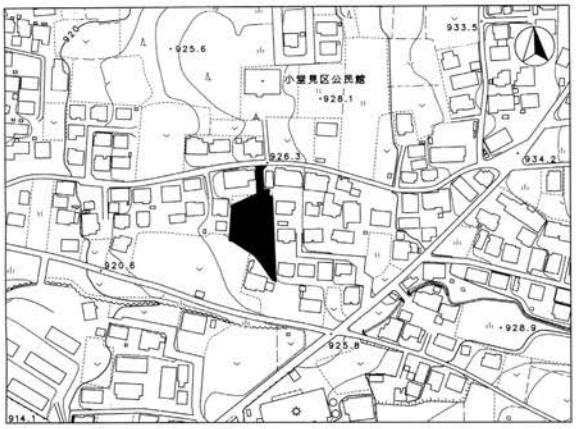
第１図　調査遺跡位置図（1/100,000）

第２章　試掘調査

平成23年度

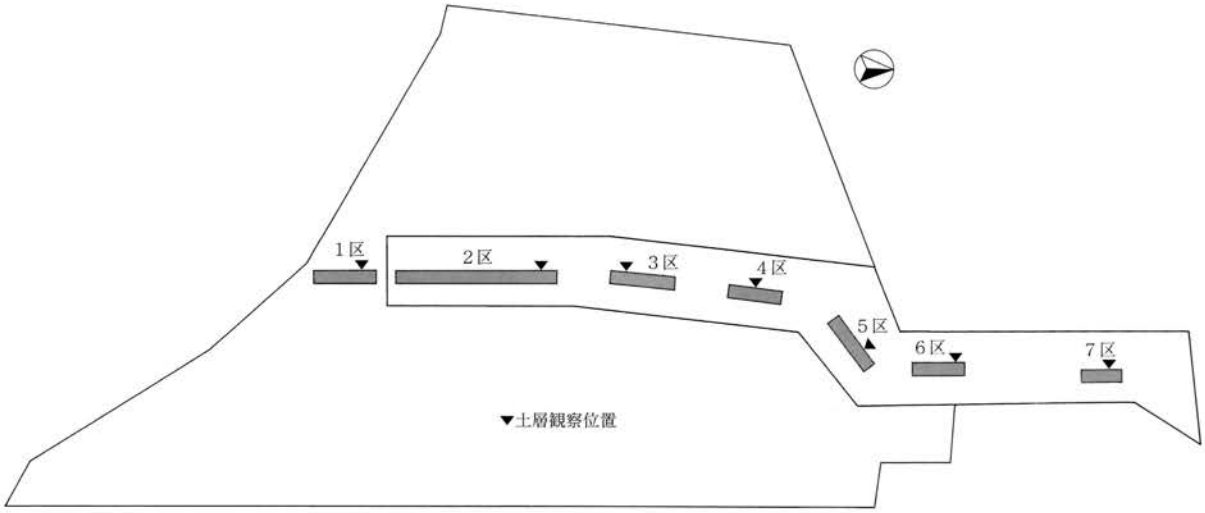
１　山田畑遺跡

（23試－１　写真図版１）

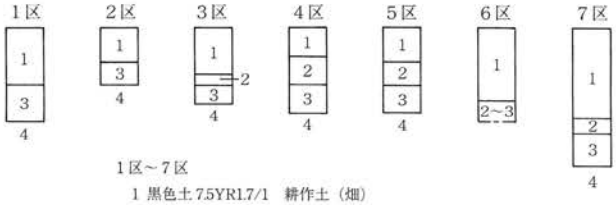


第２図　調査地点位置図（1/5,000）

遺跡番号　245
所 在 地　茅野市玉川3350－９
調査原因　道路（宅地造成）
調査期間　平成24年３月７日
調査面積　30㎡
遺　　構　なし
遺　　物　なし



第３図　調査位置図（1/500）



1区～７区
1 黒色土 7.5YR1.7/1　耕作土（畑）
2 黒褐色土 10YR2/2　地山
明黄褐色土塊２㎜～５㎝（2%）　礫２㎜～５㎝を少量含む
3 暗褐色土 10YR3/3 ～褐色土 10YR4/4　地山
明黄褐色土塊２㎜～１㎝少（10%）
4 明黄褐色土 10YR6/6　地山

第４図　土層断面図（1/40）

遺跡の概要　八ヶ岳の西麓、東西に伸びる台地上に立地する。地籍は玉川地区小堂見である。遺跡の面積は約5,000㎡、遺跡内の標高は924～930mを測る。

平成３年に遺跡登録された後、平成13年に台地の南側縁辺を東西に通じる市道改良工事に伴い、初めて発掘調査が行われた。その結果、縄文時代中期後半の集落遺跡であることが確認された。竪穴住居址は発見されなかったが、柱痕をもつ土坑、副葬品とみられるヒスイ製の垂れ飾りや大形土器片を伴う土坑、黒曜石製の剥片・砕片が廃棄された土坑など、あわせて29基発見された。墓坑とみられる土坑は数基あり、近接する位置関係にある。その状態からみて、台地の南側縁辺付近に墓域が設けられていた可能性が高い。当地域において、ヒスイ製品を伴う墓坑は、台地または扇状地の平坦部につくられた環状ないし馬蹄形を呈する中期後半の集落で、中央広場に接する墓域から発見されるのが通例である。こうした縄文集落と形や構造の異なる集落が、本遺跡につくられていた可能性もある。

幅約50mの小さな谷を隔てた南側の台地に、縄文時代中期の拠点的な集落遺跡である藤塚遺跡が所在する。

調査の概要　遺跡の北東端、台地平坦面の頂部付近にある耕作地（畑）に、５区画の宅地造成が計画された。標高は927m位である。

当該工事に伴い、地表下に掘削が及ぶ箇所は、長さ約55mの進入路の路盤とこれに付帯する側溝の基礎部分である。進入路と側溝をあわせた幅4.5～５m、地表下50cmを掘削する計画である。

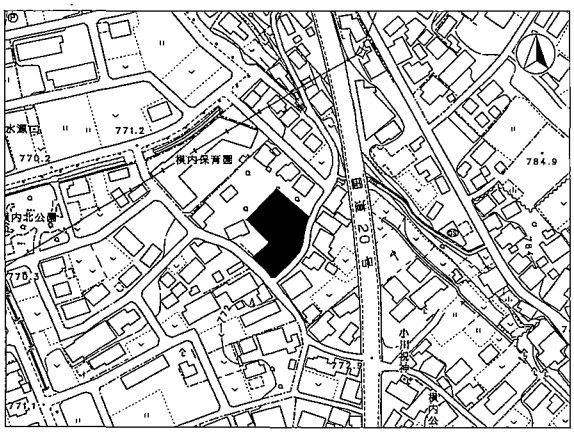
事業計画地は遺跡範囲の上で、その北側外縁部に位置するが、地形的には竪穴住居址がつくられていてもおかしくない台地の平坦面に位置している。平成18年に事業計画地の西側近接地で個人住宅建築工事に伴う調査が行われたが、遺構と遺物はいっさい発見されなかった。こうした調査の結果に基づき、台地の平坦面まで遺跡が広がらない可能性が高いと指摘された（『市内遺跡Ⅰ』18－16）。計画された工事との調整を図るとともに、北側への遺跡の広がりをみるよい機会であるため、工事に先立ち試掘調査を行うことにした。

進入路の中央付近に７箇所（１区～７区）の試掘溝を設定し、0.11㎡級のバックホーではっきりと遺構が確認できる明黄褐色土層付近まで慎重に掘り下げた。作業員を投入し掘削面を精査したが、遺構と遺物は確認されなかった。宅地となる地表に縄文土器と黒曜石を数点認めたが、調査結果を重視して、本調査へ移行する必要はないと判断した。

平成24年度

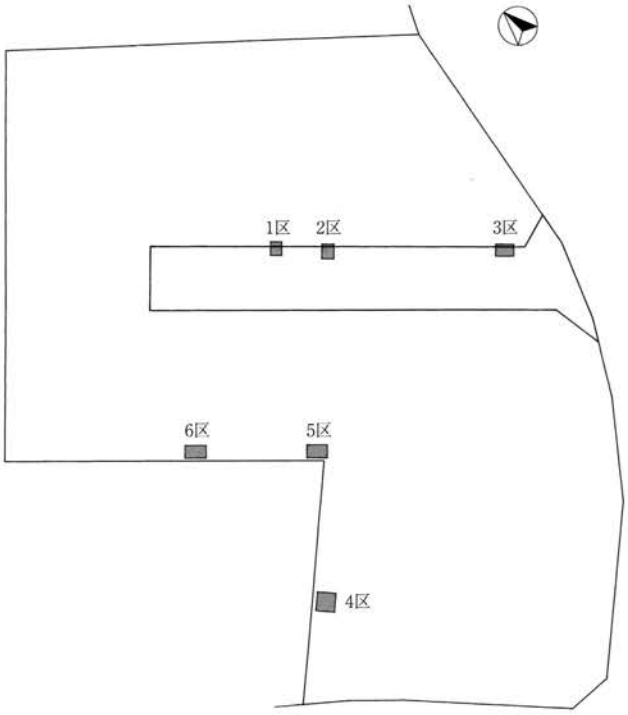
１　家下遺跡

（24試－１　写真図版１・２）

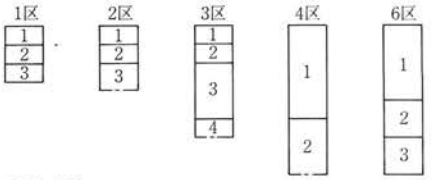


第５図　調査地点位置図（1/5,000）

遺跡番号　110
所 在 地　茅野市ちの2574－１ほか
調査原因　宅地造成
調査期間　平成24年７月11日
調査面積　６㎡
遺　　構　なし
遺　　物　弥生土器・古墳土師器２点



第６図　調査位置図（1/500）



1区～3区
1 表土
2 黒褐色砂質土（10YR3/1）＋灰黄褐色砂（10YR4/2）　盛土（埋め土）
3 黒色砂質土 10YR1.7/1　耕作土（水田？）
礫１㎜～１㎝を少量含む
4 褐色砂（砂礫）10YR4/4 地山？
礫１㎜～５㎝を大量に含む
4区
1 表土＋盛土（埋め土）
2 黒色砂質土 10YR1.7/1　耕作土　3区3層と同じ
6区
1 表土＋盛土　4区1層と同じ
2 黒色砂質土 7.5YR2/1　耕作土
3 黒褐色砂質土 10YR2/2～2/3　黒色シルト質土 10YR1.7/1 が混在

第７図　土層断面図（1/40）

遺跡の概要　茅野市街地が広がる平坦面は上川が形成した沖積地で、諏訪構造帯茅野断層と呼ばれる南東－北西に走る比高約10mの崖を境に、崖上の東側が「沖積段丘」、崖下の西側が「沖積低地」に区分される。

本遺跡は沖積段丘に位置する茅野駅の西約500m、崖直下の沖積低地に所在する。地籍はちの地区横内である。遺跡の面積は約85,000㎡、遺跡内の標高は770～772mを測る。

平成６年の土地区画整理事業に伴う発掘調査以降、約40箇所で発掘調査等が行われ、弥生時代から江戸時代まで継続する集落遺跡であることが確認された。崖下の豊富な湧水や崖下に広がる湿地を背景に、市内で最も早い時期に水稲農耕が開始され、以降、こうした生業を基盤に集落が繁栄することとなる。

集落の形成は弥生時代の中期後半に始まる。後期に入り、集落範囲の拡大とともに遺構数が急増し、本遺跡最大の繁栄期を迎える。中期後半集落のつくられた遺跡範囲北側の微高地上には、後期前半に人工の溝と自然の溝（湿地）を併用した環濠集落がつくられる。後期後半になると環濠集落が廃絶し、周溝墓･木棺墓･土器棺墓群からなる墓域となる。周溝墓の主体部や木棺墓からは、銅釧・小銅環・ヒスイ製勾玉・ガラス小玉といった希少な品々が出土した。こうした環濠集落をはじめ、様々なタイプの墓とそこから出土した遺物は、茅野市はもとより、諏訪地方で初めての発見となる。古墳時代は前期から後期まで集落が継続し、１軒のみであるが、市域の古代史上「空白期」とされる中期の竪穴住居址が発見されている。また、奈良時代も「空白期」とされる時期であるが、やはり数軒の竪穴住居址が発見されている。続く平安時代になると竪穴住居址の発見数が増加する。これら奈良・平安時代の竪穴住居址は、多くが遺跡範囲の南半から東半に分布する傾向がある。さらに本遺跡の南に接し、一体の遺跡と考えられている下蟹河原遺跡にかけて広がる可能性が高い。下蟹河原遺跡の実体がはっきりしないが、時期が新しくなるに従って、集落の中心が家下遺跡から下蟹河原遺跡へ動いている可能性が指摘される。

調査の概要　遺跡のほぼ中央部、微高地の平坦面？付近にある宅地を、７区画する造成工事が計画された。標高は772m位である。

当該工事に伴い、地表下に掘削が及ぶ箇所は、進入路の路盤とこれに付帯する側溝、および擁壁の基礎部分である。進入路は長さ約29m、幅４m、地表下30～50㎝、側溝は幅60㎝、地表下30～70㎝を掘削する計画

である。一方、隣地の西側境界に設置される擁壁は、長さ約16m、幅100cm、地表下80～100cmを掘削する計画である。

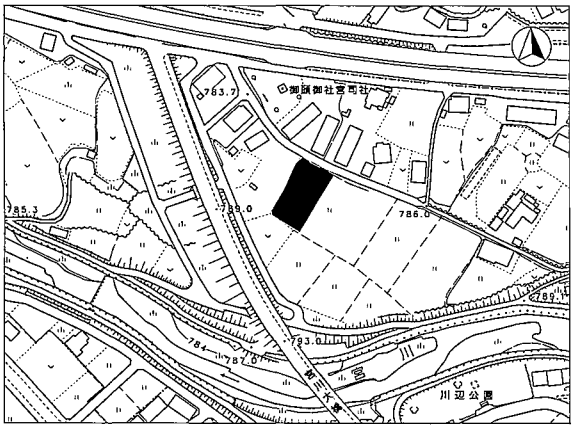
事業計画地の周辺では、これまでに数次の発掘調査等が行われ、弥生時代以降の遺構や遺物が多数発見されている。こうした調査の状況から、事業計画地の下に該期以降の遺構が存在する可能性が高いと考えられた。遺跡の保護と当該工事の調整を図るため、工事に先立ち、進入路ならびに擁壁設置範囲を対象に試掘調査を行うことにした。

それぞれの掘削範囲に３箇所（道路・側溝：１区～３区、擁壁：４区～６区）の試掘坑を設け、事業者から提供された0.28㎥級のバックホーで計画深度付近まで慎重に掘り下げた。その掘削面を精査した結果、１区と３区で表土ならびに攪乱層下の堆積層（第７図第４層）に掘削が及ぶことを確認した。調査範囲が狭いために、土層の堆積要因を明らかにできなかったが、締まりが弱く、遺物を含まない点から、地山層の可能性が高いと判断した。なお、５区は出水（湧水？）に阻まれて、十分な調査を行うことができなかった。

工事に伴う掘削が地山層の一部に及ぶものの、掘削範囲・規模からみて、当該工事は遺跡に大きな影響を与えるものでないと考えられる。こうした調査の結果ならびに所見から、本調査に移行する必要がないと判断した。

２　御社宮司遺跡

（24試－２　写真図版２）



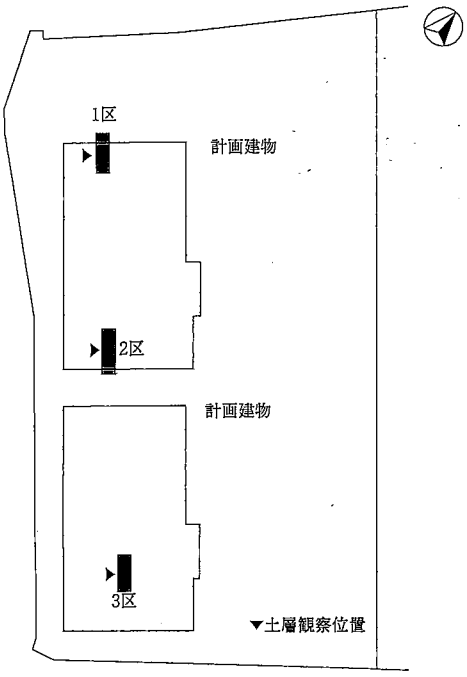
第８図　調査地点位置図（1/5,000）

遺跡番号　143
所 在 地　茅野市宮川5865－３
調査原因　集合住宅
調査期間　平成24年10月10日～15日
調査面積　８㎡
遺　　構　なし
遺　　物　なし

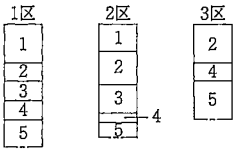
遺跡の概要　市域の南側、宮川の沖積低地と、宮川の一支流である田沢沢川の形成した扇状地末端（自然堤防状の高まり）に所在する。地籍は宮川地区宮川茅野である。遺跡の面積は約50,000㎡、遺跡内の標高は782～786mを測る。

昭和52・53年の長野県教育委員会による中央自動車道建設工事に伴う発掘調査は、県下における沖積低地を対象とした調査の先駆的な事例である。縄文時代晩期の多様な遺構（配石・炉址・土壙・黒曜石集中出土地点など）と豊富な遺物（土器・打製石鏃・打製石斧・黒曜石など）の発見から、縄文時代晩期の拠点的な集落遺跡と確認された。特に晩期後半の土器片に残る「モミ状圧痕」は、コメの存在を示唆する資料として話題となった。また、市内で初となる古墳時代中期の竪穴住居址ほか、中世以降の竪穴住居址・掘立柱建物址などが扇状地上から発見された。

平成に入り、約20箇所で各種開発事業に伴い発掘調査等が行われたが、最大規模となる長野県埋蔵文化財センターによる国道20号バイパス建設工事に伴う調査は、中世の集落や近世以降の土地利用に関わる多くの成果をもたらした。注目されるのは、諏訪大社上社から御射山社（富士見町）に通じる「御射山道」に伴う可能性がある柵列跡、この柵列に軸方向が一致する厩とみられる掘立柱建物址、出土事例の極めて稀な青銅



第９図　調査位置図（1/500）



1区～3区
1 黒色粘質土 10YR2/1　耕作土（水田）　下位に鉄分集積
2 黒色粘質土 7.5YR2/1　耕作土（水田）　下位に鉄分集積
3 黒褐色粘質土 10YR2/2　耕作土（水田）　下位に鉄分集積
4 黒褐色シルト質土 10YR2/2 または 10YR2/2（7.5YR2/2）＋にぶい黄褐色シルト質土 10YR5/3
礫 1 mm～2 cmを少量含む
5 黒褐色シルト（質土）5YR2/1（7.5YR2/1）＋黄褐色砂（10YR5/6）
礫 1 mm～20 cmを大量に含む

第10図　土層断面図（1/40）

製鞍金具や鉄製鐙金具など、中世（13世紀）に属する遺構と遺物が多数発見されたことである。そして、遺構・遺物の性格とその特殊性から、諏訪大社と深い関わりをもつ集落遺跡であることが指摘された。また、これまでの本遺跡の調査成果と、宮川を挟み南に位置する中村・外垣外遺跡（同事業ほか）の調査成果がまとめられ、宮川両岸に広がる沖積地の縄文時代から近世における土地利用の変遷が考察された。

調査の概要　遺跡の南東端、扇状地から低地に移行する南西緩斜面の耕作地（水田）に、２棟の集合住宅の建設が計画された。標高は786m位である。

当該工事に伴い、地表下に掘削が及ぶ箇所は、住宅の基礎部分である。２棟とも約180㎡の建物全体を地表下50～65cmまで掘削する計画である。

事業計画地は宮川に近い本遺跡の南側外縁部に位置し、縄文・古墳・中世集落の発見された微高地から南西に外れた土地である。しかし、「御射山道」に比定されている現道の南に接し、さらに工事による掘削が広範に及ぶため、遺跡の保護と当該工事の調整を図るため、工事に先立ち試掘調査を行うことにした。

集合住宅建設範囲に３箇所の試掘溝（１区～３区）を設定し、事業者から提供された0.28㎥級のバックホーで計画深度まで慎重に掘り下げた。作業員を投入し、掘削面を精査した結果、工事の掘削が耕作土層（水田）下に堆積する黒褐色シルト質土層や黒褐色シルト層など（第10図第４・５層）に及ぶことを確認した。これらの堆積層は、土色や土質等からみて、宮川の沖積作用により形成された層と考えられる。これらの堆積層から遺物はいっさい出土しなかった。

調査の結果から、事業計画地は宮川の低地にかかる場所であることが明らかとなった。遺構の存在する可能性が極めて低いと考えられるため、本調査に移行する必要がないと判断した。

3　上原城下町遺跡

（24試－3　写真図版２・３）

第11図　調査地点位置図（1/5,000）

遺跡番号　224

所 在 地　茅野市ちの1221－１ほか

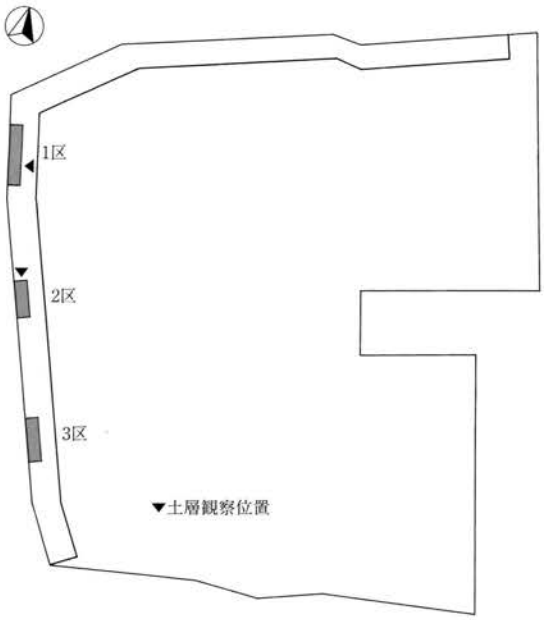
調査原因　宅地造成

調査期間　平成24年８月29日～30日

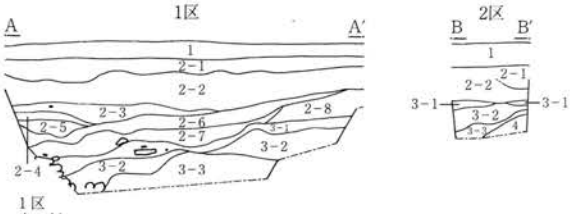
調査面積　８㎡

遺　　構　なし

遺　　物　中世土師質土器・時期不明土器７点、近世陶器２点



第12図　調査位置図（1/500）



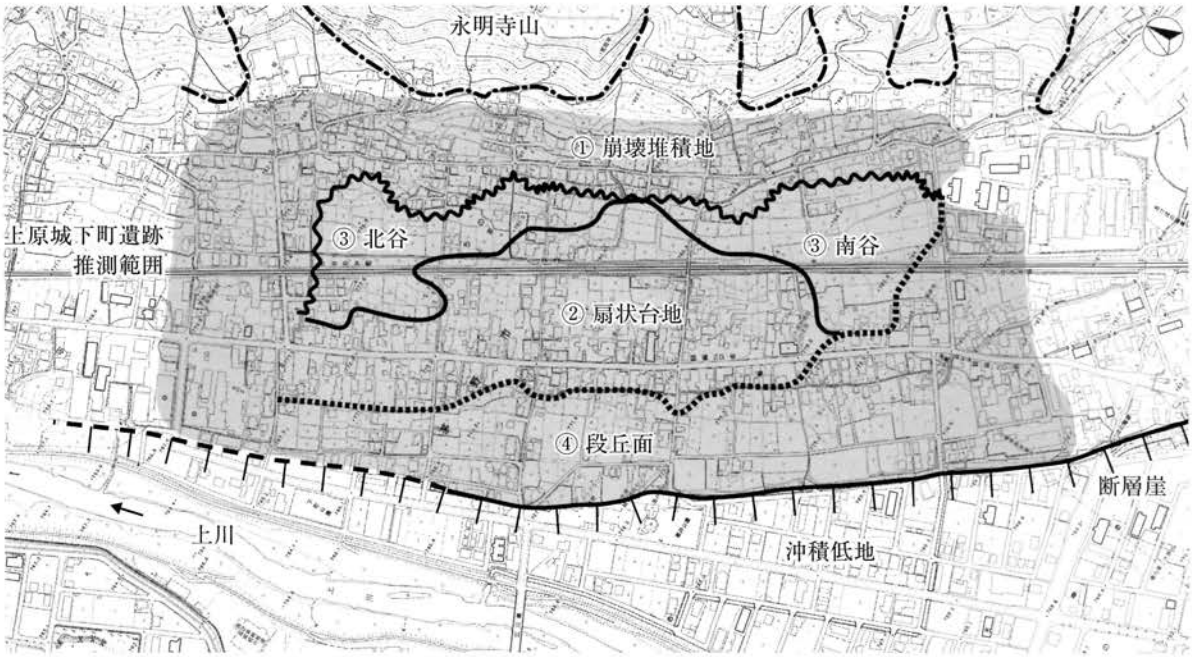
1区
A－A′
2－1 黒色砂質土 10YR1.7/1　耕作土（水田）　下位に鉄分集積
　炭化物１㎜～１cm（3%）　礫１㎜～１cmを含む
2－2 黒色砂質土 7.5YR2/1　特に硬い　盛土（埋め土）
　炭化物１㎜～１cm（3%）　礫１㎜～１cmを大量に含む
2－3 黒色土 10YR2/1　硬いが２－１・２より軟らかい　盛土（埋め土）
　礫１～５㎜を少量含む
2－4 黒褐（砂質）土 10YR2/2　硬い 盛土（埋め土）
　にぶい黄褐色粘（質）土塊１㎜～1.5 cm（7%）　礫１～５㎜を少量含む
2－5 暗灰黄色砂 2.5YR5/2＋黒色（粘質）土 7.5YR2/1　硬い
　礫１～５㎜を大量に含む
2－6 黒褐色土 10YR3/1　硬い
　にぶい黄橙色砂質土塊 10YR6/4 または明黄褐色砂質土 10YR6/6 １～５㎜（15%）　礫１㎜～1.5 cmを少量含む
2－7 黒褐色土 10YR2/2　硬い
　にぶい黄色粘（質）土塊１㎜～１cm（15%）　礫１～５㎜を少量含む
2－8 黒色土 2.5YR2/1＋黒色粘（質）土 10YR1.7/1＋黒褐色砂 10YR2/2　土手？
　にぶい黄色粘（質）土塊１㎜～２cm（15%）　礫１㎜～1.5 cmを少量含む
3－1 黒色粘（質）土 10YR2/1＋黒褐色砂 10YR2/2（にぶい黄褐色砂 10YR4/3）
　にぶい黄色粘（質）土塊１～２㎜（3%）　礫１㎜～30 cmを大量に含む
3－2 黒褐色砂 10YR2/2＋にぶい黄褐色砂 10YR5/3
　黒色粘（質）土塊 2.5Y2/1 または 10YR2/1 ～５cm（15%）　礫１㎜～１cmを少量含む
3－3 にぶい黄褐色（粗）砂 10YR5/3　黒褐色砂 10YR2/2 が縞状に入る
2区
B－B′
　1 1区１層と同じ
2－1 1区２－１層と同じ
2－2 1区２－２層と同じ
3－1 黒褐色（粗）砂 10YR3/2＋黒色粘質土 10YR2/1（斑状）
　炭化物１～５㎜（1%）　礫１㎜～１cmを含む
3－2 黒褐色（粗）砂 10YR3/2
　炭化物１～５㎜（1%）　礫１㎜～１cmを含む
3－3 3－1層に類似
　4 黒色粘（質）土 10YR1.7/1
　炭化物１～５㎜（1%）

第13図　土層断面図（1/40）

遺跡の概要　市域の北端に位置する永明寺山（1,119m）の一支脈金比羅山（978m）には、県史跡「諏訪氏城跡上原城」が築かれる。その直下、西向きの緩やかな斜面一帯に本遺跡は所在する。地籍はちの地区上原である。遺跡内の標高は768～805mを測る。

城下町のなごりを留める小字や地割りから、上原集落のほぼ全域となる約535,000㎡が遺跡に登録されている。平成２年の試掘調査（詳細分布調査）以降、各種の開発工事に伴う発掘調査等が160箇所以上で行われた結果、中世城下町に関わる遺構のほかに、弥生時代中期後半から平安時代の竪穴住居址、弥生時代から古墳時代の墓（周溝墓・古墳）などが確認された。また、遺構は発見されていないものの、縄文土器の出土も報告されている。

100箇所を優に超える発掘調査等によって、さまざまな地点で土層の堆積状態が記録されてきた。その結果、遺跡内の地山層（基盤層）が、① **黒雲母花崗岩・花崗閃緑岩の大形角礫を多量に含む黒色～明黄褐色（砂質）**



第14図　上原城下町遺跡の範囲と地形区分（1/10,000）

土層、② 礫を含まない明黄褐色（砂質）土層（再堆積のローム層？）、③ 粘土・シルト・砂からなる層、④ 安山岩系の円礫を多量に含む明黄褐色砂礫層に大別できることを確認した。それぞれの範囲を現況平面図ならびに地質図と重ねたところ、**① 永明寺山の山裾にみられる大小の崩壊堆積地形、② 永明寺山の裾から国道20号付近までの間に広がる崩壊堆積土による扇形を呈する台地、③ 扇形の台地の東・西側に接する永明寺山からの伏流水等による谷（湿地）、④ 上川の沖積作用を受けた国道20号付近から断層崖までの間に広がる扇形の台地より一段低い段丘** の小地形に区分できる見通しを得た（第14図）。本書ではこれらの小地形を、**① 崩壊堆積地、② 扇状台地、③ 谷（北側を北谷、南側を南谷）、④ 段丘**と呼称し、各地点の報告を進めていくこととする。

調査の概要　遺跡の中央付近、「扇状台地」扇頂部に位置する宅地造成地に擁壁の建設が計画された。標高は782～786m位である。

当該工事に伴い、地表下に掘削が及ぶ箇所は、造成地の北側および西側境界に設置される擁壁の基礎部分で、長さ約65m、幅約200cm、地表下100～155cmを掘削する計画である。

事業計画地とその隣接地では、平成20年以降、数次の確認調査等が行われ、弥生時代から近世の遺物や、中世の遺構埋土とみられる土層が確認されている（『市内遺跡Ⅲ』試－７、『市内遺跡６』23試－４）。こうした遺跡の情報に加え、規模の大きな掘削が広範に及ぶことから、遺跡の保護と当該工事の調整を図る目的で、工事に先立ち試掘調査を行うことにした。

擁壁設置範囲に３箇所の試掘溝（１区～３区）を設定し、0.28㎥級のバックホーで計画深度付近まで慎重に掘り下げを進めた。作業員を投入し、掘削面を精査した結果、１区の地表下約120cmに中世土師質土器や近世陶器を含む遺物包含層（第13図第３－１・２層）を確認した。土色・土質等からみて、この遺物包含層は出水に伴う自然堆積層と考えられるものであった。なお、２区および３区は大量の出水によって断面の調査に留めた。

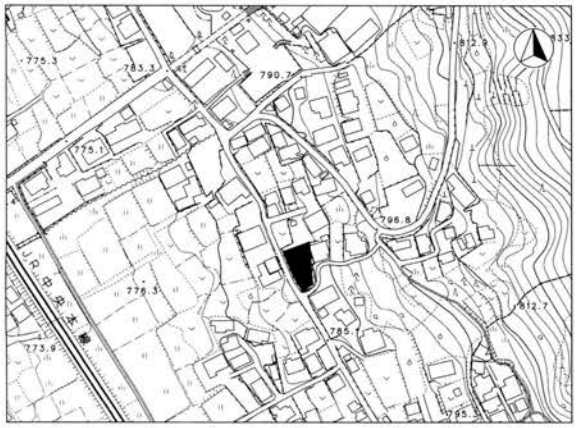
調査の結果ならびに所見から、事業計画地の下に遺構が存在する可能性は極めて低いと考えられた。そのため、本調査に移行する必要がないと判断した。

第３章　本調査および工事立会

平成23年度

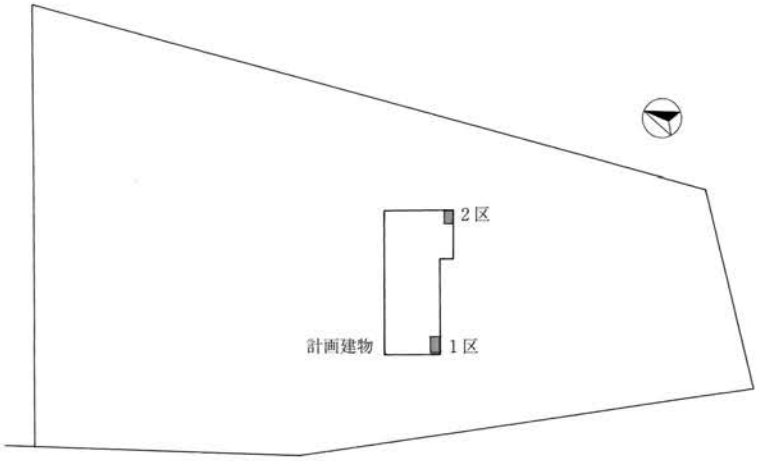
１　上原城下町遺跡

（23－１　写真図版３）

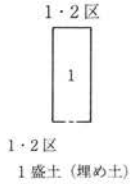


第15図　調査地点位置図（1/5,000）

遺跡番号　224
所 在 地　茅野市ちの1768
調査原因　個人住宅
調査期間　平成24年３月28日
調査面積　１㎡
遺　　構　なし
遺　　物　なし



第16図　調査位置図（1/300）



第17図　土層断面図（1/40）

調査の概要　遺跡の北側、「崩壊堆積地」の末端付近にある個人住宅が増築されることになった。標高は788m位である。

当該工事に伴い、地表下に掘削が及ぶ箇所は、住宅の基礎部分である。約11㎡の建物の外周を、幅80cm、地表下60cmまで掘削する計画である。

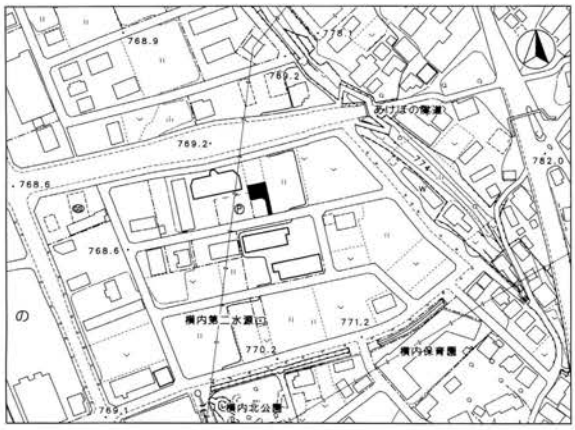
事業地は急な斜面に位置し、原地形を大きく切り盛りして宅地造成された土地である。掘削の及ぶ地点、ならびにその深度からみて、基礎工事は造成土内で行われる可能性が高く、市教育委員会職員の立ち会いのもとで工事を進めてもらうことにした。また土層の確認ならびに記録作成に対し協力を求めた。

工事立ち会いの結果、予想どおり造成土が確認され、この土層内で掘削が止まることを確認した。これにより当該工事による遺跡への影響はないと判断した。

平成24年度

1　家下遺跡

（24－1　写真図版４）



第18図　調査地点位置図（1/5,000）

遺跡番号　110

所 在 地　茅野市ちの285－4

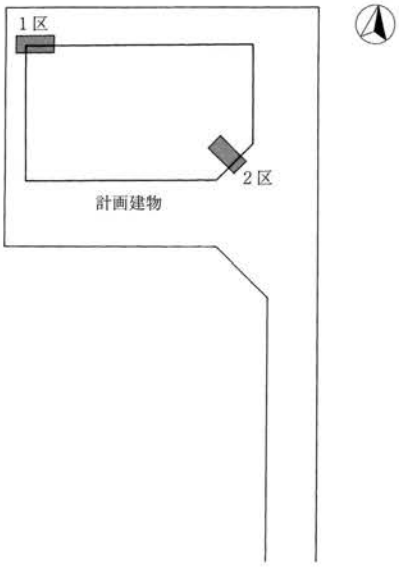
調査原因　個人住宅

調査期間　平成24年９月25日

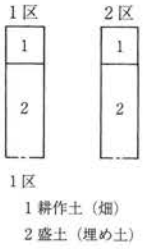
調査面積　２㎡

遺　　構　なし

遺　　物　なし



第19図　調査位置図（1/300）



第20図　土層断面図（1/40）

調査の概要　遺跡の北西端、微高地に沿う谷（湿地）に個人住宅が建築されることになった。標高は770m位である。

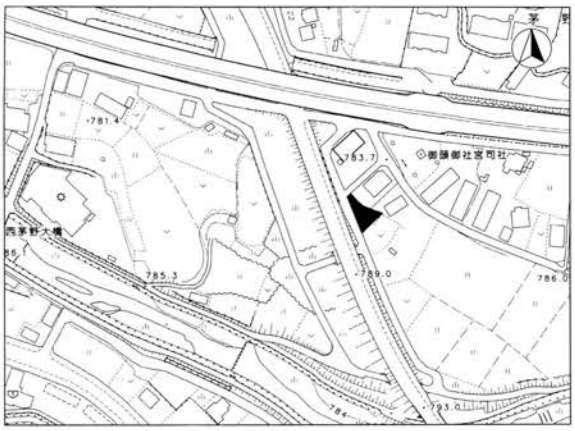
当該工事に伴い、地表下に掘削が及ぶ箇所は、住宅の基礎部分である。約50㎡の建物の外周を、幅70cm、地表下70cmまで掘削する計画である。

事業地は平成に始まる土地区画整理事業の際に、厚い盛土（埋め土）によって造成された土地である。基礎工事はこの盛土内で行われる可能性が高く、市教育委員会職員の立ち会いのもとで工事を進めてもらうことにした。また土層の確認ならびに記録作成に対し協力を求めた。

工事立ち会いの結果、予想どおり盛土が確認され、この土層内で掘削が止まることを確認した。これにより当該工事による遺跡への影響はないと判断した。

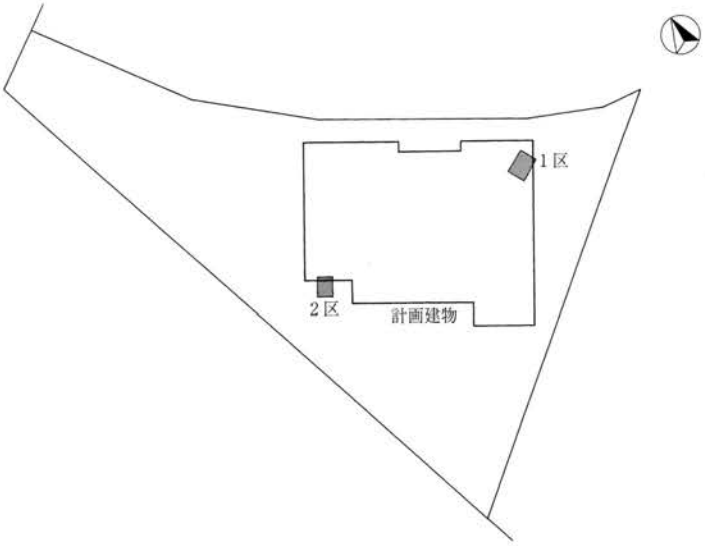
2　御社宮司遺跡

（24－2　写真図版４）

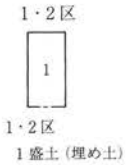


第21図　調査地点位置図（1/5,000）

遺跡番号　143
所 在 地　茅野市宮川5858－３
調査原因　個人住宅
調査期間　平成24年10月２日
調査面積　２㎡
遺　　構　なし
遺　　物　なし



第22図　調査位置図（1/300）



第23図　土層断面図（1/40）

調査の概要　遺跡の南側、微高地の南に沿う低地（谷）に個人住宅が建築されることになった。標高は784m位である。

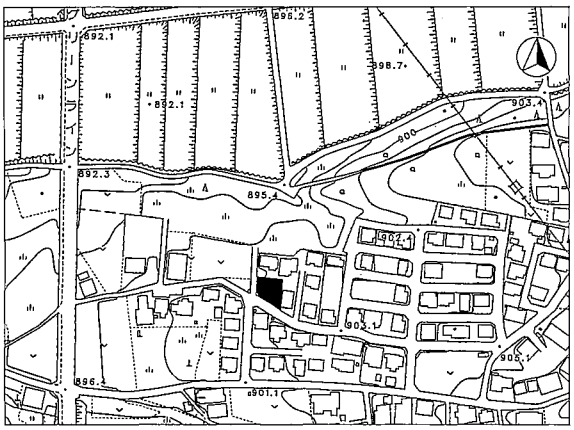
当該工事に伴い、地表下に掘削が及ぶ箇所は、住宅の基礎部分である。約58㎡の建物の外周を、幅80cm、地表下40cmまで掘削する計画である。

事業地は国道20号バイパスの側道に接する土地である。周囲に残る耕作地の高さからみて、側道に合わせて盛土（埋め土）された土地であることは明らかであった。基礎工事はこの盛土内で行われる可能性が高く、市教育委員会職員の立ち会いのもとで工事を進めてもらうことにした。また土層の確認ならびに記録作成に対し協力を求めた。

工事立ち会いの結果、予想どおり盛土が確認され、この土層内で掘削が止まることを確認した。これにより当該工事による遺跡への影響はないと判断した。

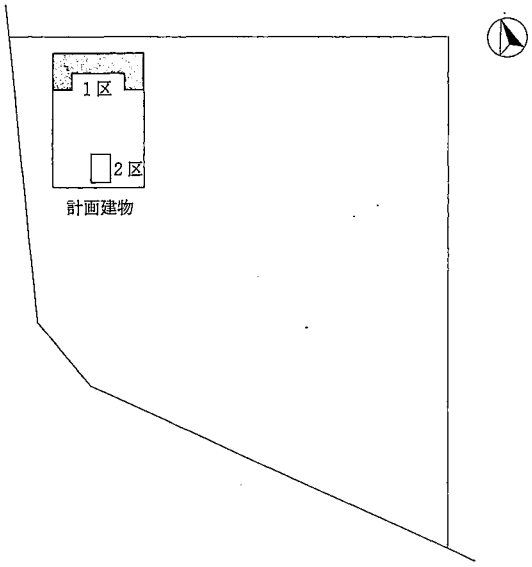
3　小堂見遺跡

（24－3　　写真図版５）

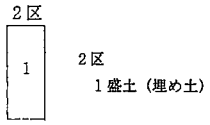


第24図　調査地点位置図（1/5,000）

遺跡番号　160
所 在 地　茅野市玉川3240－3
調査原因　個人住宅
調査期間　平成24年７月26日
調査面積　５㎡
遺　　構　なし
遺　　物　なし



第25図　調査位置図（1/300）



第26図　土層断面図（1/40）

遺跡の概要　八ヶ岳の西麓、東西に伸びる台地上に立地する。地籍は玉川地区神之原である。遺跡面積は約28,000㎡、遺跡内の標高は903～890mを測る。本遺跡の周辺は昭和50年代以降、急速に宅地化した地域であり、遺跡の東限まで住宅地が迫っている。平成７年には遺跡の中央を南北に貫く広域農道（通称：ふるさとグリーンライン）が建設されたほか、平成19年にはこの道沿いに店舗ならびに医療施設が建設された。このような開発の著しい場所に本遺跡は位置する。

平成３年の宅地造成工事に伴う発掘調査以降、これまでに８次の調査等が行われ、遺跡の西半に縄文時代中期初頭の集落、東半に平安時代前期の集落が確認された。縄文時代とみられる落し穴も発見され、時期によっては狩場に利用されたことも確認されている。これらの遺構は、八ヶ岳の西麓において、通常遺構検出の少ない北向きの斜面から発見されている。その背景に、北側斜面が南側斜面より傾斜が緩やかで、生活用水を北側斜面の裾から湧き出す水量豊富な清水に求めたことが考えられている。

調査の概要　遺跡の東側、北側緩斜面にある個人住宅が増築されることになった。標高は900m位である。

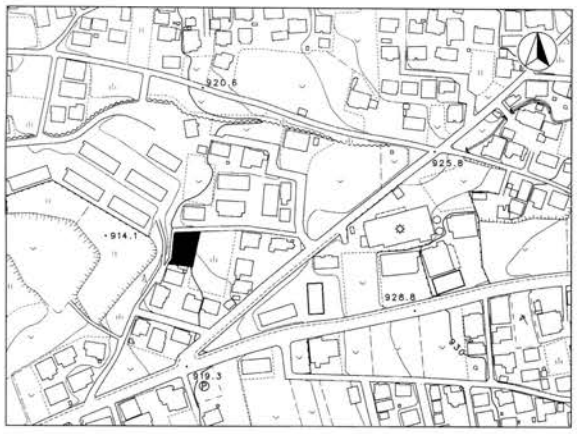
当該工事に伴い、地表下に掘削が及ぶ箇所は、住宅の基礎部分である。約20㎡の建物の外周を、幅80cm、地表下50cmまで掘削する計画である。

事業地は切り盛りによって造成された土地である。基礎工事はこの盛土（埋め土）内で行われる可能性が高く、市教育委員会職員の立ち会いのもとで工事を進めてもらうことにした。また土層の確認ならびに記録作成に対し協力を求めた。

工事立ち会いの結果、宅地造成時の盛土が確認され、この土層内で掘削が止まることを確認した。これにより当該工事による遺跡への影響はないと判断した。

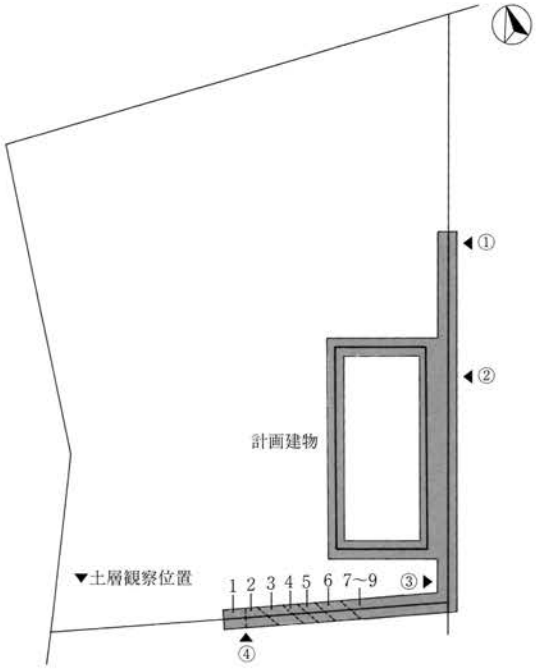
4　藤塚遺跡

（24－4　写真図版5・6）

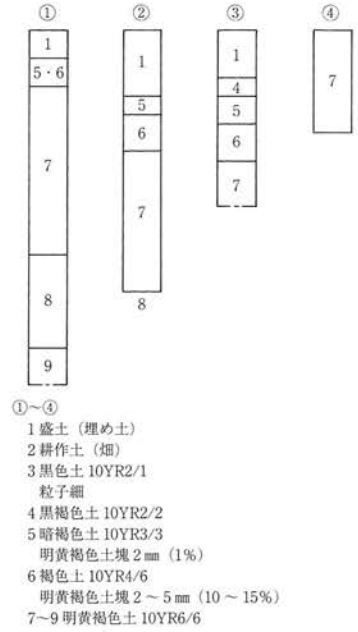


第27図　調査地点位置図（1/5,000）

遺跡番号　162
所 在 地　茅野市玉川3580－1
調査原因　個人住宅
調査期間　平成24年4月12日～5月14日
調査面積　37㎡
遺　　構　なし
遺　　物　縄文土器6点、黒曜石1点（0.1g）



第28図　調査位置図（1/300）



第29図　土層断面図（1/40）

遺跡の概要　八ヶ岳の西麓、東西に伸びる長峰状の台地に立地する。地籍は玉川地区小堂見である。遺跡の面積は約38,000㎡、遺跡内の標高は928～918mを測る。遺跡の中央を東西に通じる市道が早い時期に整備されたことを契機に、本遺跡とその周辺は早くから宅地化が進行した。

『諏訪史』第一巻（1924）の「諏訪郡先史時代遺物発見地名表」に藤塚の名が記されている。このように、古くから縄文土器や石鏃などが採集できる遺跡として知られていた。また、市内にある縄文遺跡の中で早くから調査が行われた遺跡でもあり、昭和32年以降、約30箇所で発掘調査等が行われている。

昭和32年、市道に挟まれた遺跡の中央やや北寄りにある玉川中学校（当時）の実習地で、社会科の学習を目的に本遺跡で最初の調査が行われた。昭和34年にも同様の調査が行われ、平面形が隅丸方形を呈し、長方形の石囲炉をもつ縄文時代中期の竪穴住居址が2軒発掘された。その後、市道拡幅・個人住宅建築・宅地造成工事等に伴う発掘調査によって、縄文時代中期（前半末～後半）の竪穴住居址が30軒以上確認された。竪穴住居址は遺跡中央から南半に集中し、その分布状態から、南北160m、東西120mの環状ないし馬蹄形集落の形成が推測されている。また、集落の中心部とみられる場所を調査したところ、黒褐色土層中に据えられ

た中期後半（末葉？）の配石が確認された。このように本遺跡は、縄文時代中期後半に特に繁栄した拠点的な性格をもつ集落遺跡である。

調査の概要　遺跡に登録された台地の平坦面は、遺跡範囲東限付近から分岐する南北２つの高まりによって、西に開口する窪地状の小地形を呈する。この北側をなす高まりの南西斜面にある宅地に、個人住宅とこれに伴う擁壁が建設されることになった。標高は920m位である。

当該工事に伴い、地表下に掘削が及ぶ箇所は、住宅と擁壁の基礎部分である。住宅は約29㎡の建物の外周を、幅70cm、地表下55～65cmまで掘削する計画である。一方、東側および南側の敷地境界に設置される擁壁は、長さ約24m、幅80cm、地表下55～190cmを掘削する計画である。

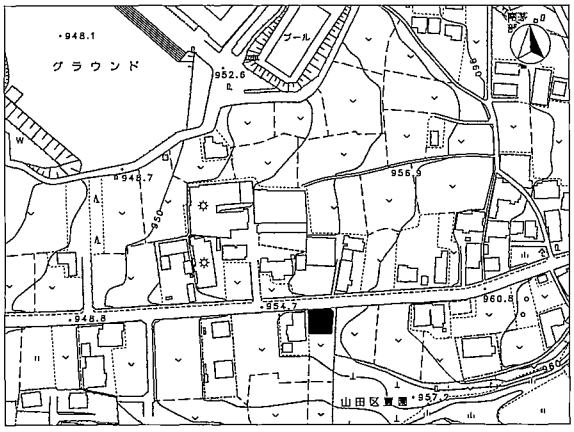
平成17年、事業地の南に接する個人住宅の建て替えに伴い発掘調査が行われた（『市内遺跡』Ⅰ　17－11）。その結果、黒色土層と黒褐色土層の層界付近から、縄文時代中期後半の一括土器と安山岩製の石棒が、数点の大形板状礫とともに発見された（１号配石）。隣接地から発見されたこうした遺構から、事業地の下に縄文時代の何らかの遺構が存在するものと考えられた。しかし、工事の規模が小さいため、まずは教育委員会職員の立ち会いのもとで工事を進めてもらい、遺構が発見され、これが工事によって失われてしまう場合には、記録作成のための時間を確保していただくよう協力を求めた。

先行する擁壁の基礎工事に立ち会った結果、南西端を除き、耕作土層以下の土層に掘削が及ぶことを確認した。その後の住宅の基礎工事に伴う立ち会いでも、同様の結果であった。そこで、遺構の有無を確認する必要が生じ、事業者から承諾を得て掘削面を精査した。しかし、擁壁西側の黒色土層（遺物包含層　第28図第３層）から、僅かに縄文時代中期とみられる土器片が６点、黒曜石の剥片が１点出土しただけであった。

調査終了後、東に接する畑を歩いてみたが、縄文土器と黒曜石がたまに目に止まる程度の散布状態であった。付近に縄文集落がつくられているとしても、竪穴住居址や土坑などの集落を構成する主要な遺構は、この急な斜面を避けてつくられているように思われる。

5　一本木遺跡

（24－５　写真図版６）



第30図　調査地点位置図（1/5,000）

遺跡番号　163
所 在 地　茅野市玉川8428－１の一部
調査原因　個人住宅
調査期間　平成24年11月27日
調査面積　46㎡
遺　　構　なし
遺　　物　なし

遺跡の概要　八ヶ岳の西麓、東西に伸びる台地上に所在する。地籍は玉川地区山田である。台地平坦面の頂部付近から南側斜面に縄文時代中期末葉の土器や石器が散布し、約25,000㎡が遺跡に登録されている。遺跡内の標高は960～946mを測る。

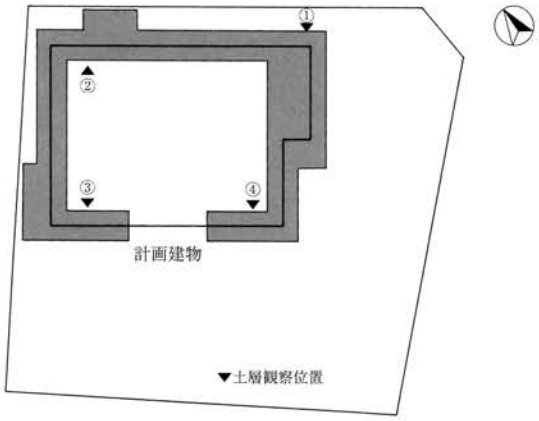
平成に入り、本遺跡とその周辺は急速に宅地化したが、調査事例が極めて少ない。平成10年に遺跡西端の個人住宅建築工事に伴う工事立会で、時期不明の土坑が発見された以外に、調査等による遺跡の情報は得られていない。そのために、遺跡の広がり・時期・性格などは不明なままである。

調査の概要　遺跡のほぼ中央、台地平坦面の頂部付近にある耕作地（畑）に個人住宅が建築されることになった。標高は957m位である。

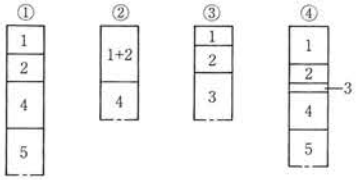
当該工事に伴い、地表下に掘削が及ぶ箇所は、住宅の基礎部分である。約66㎡の建物の外周を、幅65cm、地表下50～80cmまで掘削する計画である。

遺跡に関する情報が余りもに少ないため、事前に現地を踏査した。しかし地表に土器や黒曜石はいっさい認められなかった。こうした状況に加え、工事の規模が小さいことから、教育委員会職員の立ち会いのもとで工事を進めてもらうことにした。また土層の確認ならびに記録作成に対し協力を求めた。

工事を進める中で、施工上の理由から掘削幅が120～230cmとなり、基礎東側で明黄褐色土層（ローム層）、基礎西側で黒褐色土層または暗褐色土層に掘削が及ぶこととなった。事業者から承諾を得て、掘削面を精査したが、遺構と遺物は確認されなかった。



第31図　調査位置図（1/300）

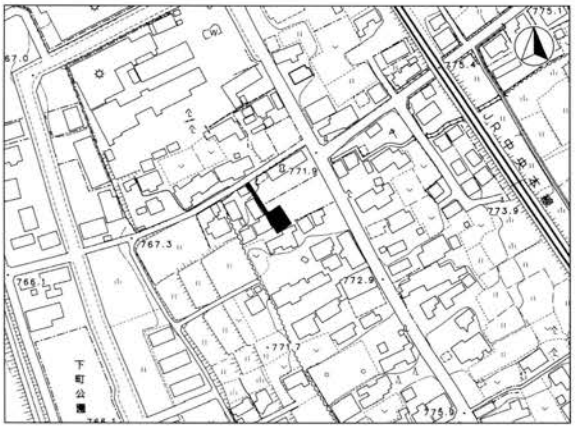


①～④
1 耕作土（畑）
2 黒色土 10YR1.7/1　耕作土・攪乱
　暗褐色土 10YR3/3 塊　混在
3 黒褐色土 10YR2/2 ～ 2/3
4 暗褐色土 10YR3/3 ～ 3/4
5 明黄褐色土 10YR6/6

第32図　土層断面図（1/40）

6　上原城下町遺跡

（24－6　写真図版７・８）



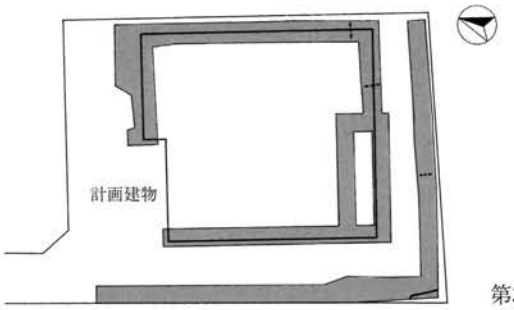
第33図　調査地点位置図（1/5,000）

遺跡番号　224
所 在 地　茅野市ちの697－２ほか
調査原因　個人住宅
調査期間　平成24年７月27日～８月21日
調査面積　42㎡
遺　　構　古墳後期住居址１軒、竪穴状遺構２基、土坑１基
遺　　物　弥生土器・古墳土師器・中世土師質土器59点、近世陶器２点

調査の概要　遺跡の西側、「扇状台地」扇端部の西側緩斜面に、個人住宅とこれに伴う擁壁が建設されることになった。標高は771m位である。

当該工事に伴い、地表下に掘削が及ぶ箇所は、住宅と擁壁の基礎部分である。住宅の基礎は約69㎡の建物の外周を、幅60cm、地表下60cmまで掘削する計画である。一方、敷地の西側および南側境界に設置される擁壁の基礎は、長さ約25m、幅60cm、地表下60～110cmを掘削する計画である。

事業地から約100m南に離れた場所で、平成19年に集合住宅建築工事に伴う確認調査が行われ、弥生時代中期後半から平安時代の竪穴住居址が発見された（『市内遺跡Ⅱ』試－８）。こうした周辺の調査の状況から、



第34図　調査位置図（1/300）

事業地まで該期の集落が広がるものと考えられたが、工事の規模が小さいことから、市教育委員会職員の立ち会いのもとで工事を進めてもらうことにした。なお、遺構が発見され、やむを得ず失われてしまう場合には、記録作成のための時間を確保していただくよう事業者に対し協力を求めた。

先行の擁壁設置に伴う工事を進める中で、施工上の理由から、掘削幅が一部160cmまで拡がることになった。計画された深度に達する前に、地山である明黄褐色土層が露出し、その面に遺構の可能性がある落ち込みが確認された。そのため、施工業者に対し、この面より高い位置で掘削を止めてもらうよう協力を求めた。掘削終了後、事業者から承諾を得て掘削面を精査した結果、擁壁南側の掘削面に古墳時代後期の竪穴住居址（1号住居址）、時期不明の竪穴状遺構（1号竪穴状遺構）ならびに柱穴（1号土坑）を確認した。

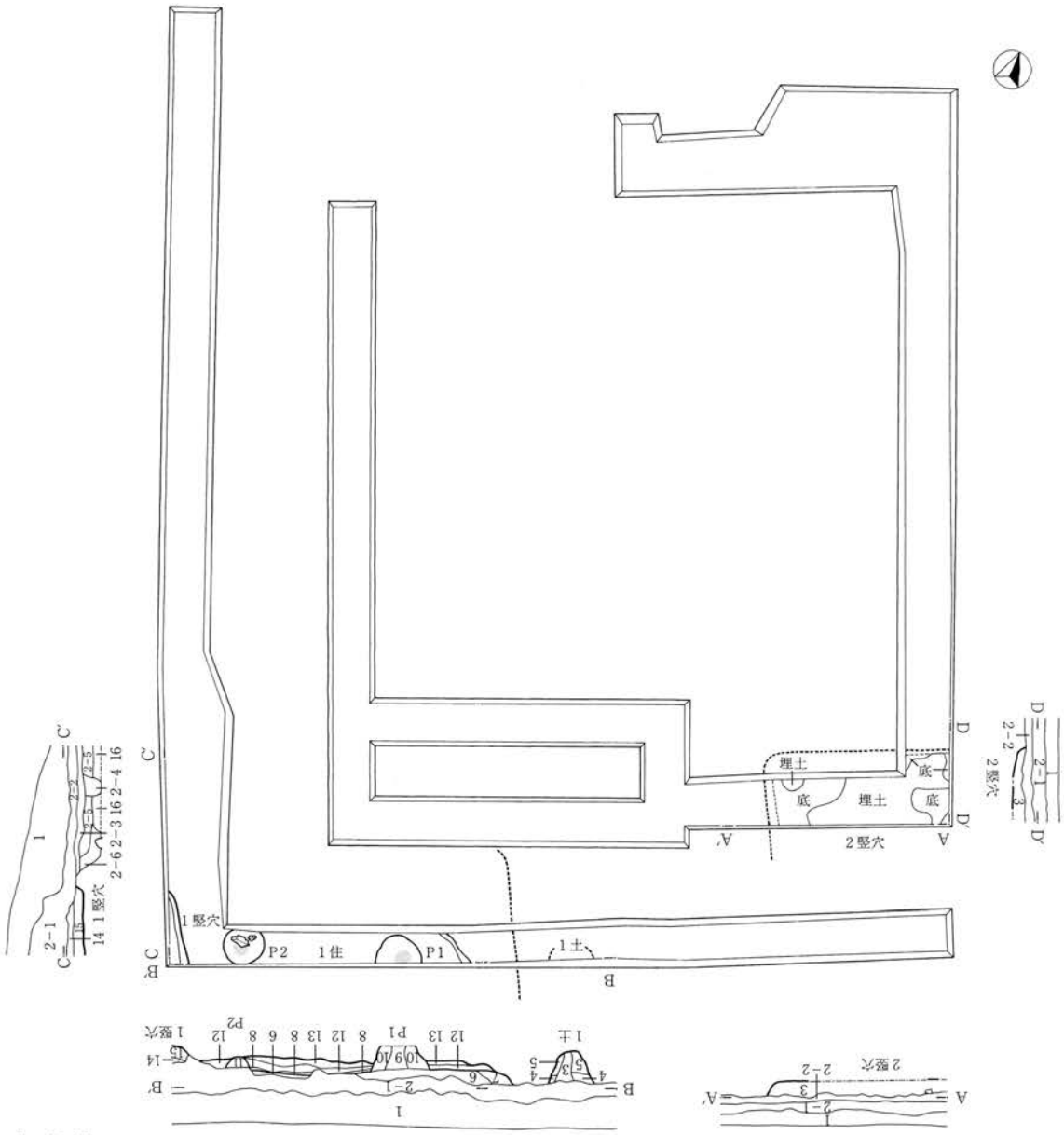
その後、住宅の基礎工事に立ち会ったが、やはり施工上の理由から掘削幅が一部160cmまで拡大した。この掘削面にも落ち込みが認められ、精査によって近世以降の竪穴状遺構（2号竪穴状遺構）であることを確認した。

事業関係者の遺跡保護に対する配慮から、1号住居址と1号竪穴状遺構は埋土がしっかり残る状態で検出された。しかし計画どおりに工事が進められた場合、1号住居址ではその上面が、1号竪穴状遺構では遺構そのものの削平は明らかであった。事業者とその保護を協議したが、隣接する宅地面との関係から設計変更は不可能であり、削平される範囲を対象に発掘調査を行い、記録保存することで合意した。また、計画深度より深く掘り込まれた箇所（1号住居址の柱穴2箇所、2号竪穴状遺構の埋土と床の一部）については、工事用の砕石で埋め戻し、構築物の下に現状保存することにした。

1号住居址

遺構の概要　床であろう硬く平らな面、その面で確認した柱穴とみられる2箇所の穴（P1・2）などの存在から竪穴住居址と判断した。時期は出土した土器から古墳時代後期と考えられる。重複する1号竪穴状遺構より古い遺構である。

平面形は該期に共通の方形と考えられる。上原城下町遺跡では、平成24年3月現在、該期の竪穴住居址が50軒以上確認・調査されているが、プランの明らかとなった住居址の大半は、主軸が概ね北東－南西を指し、カマドが北東側の壁中央に設けられている。カマドは発見されなかったものの、2箇所の柱穴の位置から考えて、本遺構もそのようなプランをもつ竪穴住居址であろう。南北断面で確認した壁となる立ち上がりと柱穴の位置関係から、壁の長さは一辺が5.5m程度と推測される。主軸は柱穴どうしを結んだN－67°－E前後となる。断面に残る高さ10cmの壁は、緩やかな角度で床へと続く。床は地面を荒く掘り窪めた後、明黄褐色土塊を大量に含む暗褐色土と黒色土を10～20cmの厚さで埋め戻し（掘方埋土、第35図B断面第12・13層）、その上に黒色土と明黄褐色土の混在土を貼床してつくられる（同図第8層）。柱穴間の掘方埋土ならびに貼床が厚いためか、中央付近の床が盛り上がっている。2箇所の柱穴は直径60cm前後の円形を呈し、中央付近に直径20～25cmの柱痕が確認された。床までの埋土は2層に分けられ、壁側から流れ込む状態を示す。



A－A′ ・D－D′

1 盛土（埋め土）

2－1 黒色粘質土 10YR3/1 耕作土（水田） 下位に鉄分集積

2－2 黒色粘質土 7.5YR3/1 耕作土？
明黄褐色土塊 2 ㎜～1 ㎝（5%）

3 黒色土 2.5Y2/1（10YR2/1）粘性あり 2 竪穴
明黄褐色土塊 1 ㎜～1.5 ㎝（7%） 炭化物 1～5 ㎜（10%） 焼土粒子 1～2 ㎜（1%） 礫 1 ㎜～1 ㎝を少量含む

B－B′ （一部 C－C′ ）

1 A－A′ ・D－D の 1 層と同じ

2－1 A－A′ ・D－D の 2－1 層と同じ

3 黒色土 10YR2/1 柱痕 1 土
明黄褐色土塊 1 ㎜～3 ㎝（5%） 炭化物 1～2 ㎜（1%） 礫 1～5 ㎜を少量含む

4 黒褐色土 10YR2/2 1 土
明黄褐色土塊 1 ㎜～1 ㎝（5%） 礫 1～5 ㎜を少量含む

5 黒褐色土 10YR2/2～2/3 1 土
明黄褐色土塊 1 ㎜～3 ㎝（10%） 礫 1～5 ㎜を少量含む

6 黒色土 7.5YR2/1 1 住埋土
明黄褐色土塊 1～2 ㎜（2%） 炭化物 1～2 ㎜（1%） 焼土粒子・塊 1 ㎜（1%） 礫 1～5 ㎜を少量含む

7 黒褐色土 10YR2/2 1 住埋土
明黄褐色土塊 1 ㎜～3 ㎝（15%） 炭化物 1 ㎜（1%） 礫 1～5 ㎜を少量含む

8 黒色土 7.5YR2/1 硬い 貼床 1 住
明黄褐色土塊 1 ㎜～2 ㎝（20%） 炭化物 1 ㎜（1%） 礫 1～5 ㎜を少量含む

9 黒褐色土 10YR2/2 P2 柱痕
明黄褐色土塊 1 ㎜～2 ㎝（10%） 炭化物 1 ㎜（1%） 礫 1～5 ㎜を少量含む

10 黒褐色土 10YR3/2 P2 掘方埋土
明黄褐色土塊 1 ㎜～5 ㎝（40%） 炭化物 1 ㎜（1%） 礫 1～5 ㎜を少量含む

11 黒褐色土 10YR2/2 P3 掘方埋土
明黄褐色土塊 1～5 ㎜（5%）礫 1～5 ㎜（2%）

12 黒色土 10YR1.7/1＋2/1 硬い 1 住掘方埋土
明黄褐色土塊 1 ㎜～3 ㎝（20%） 炭化物 1 ㎜（1%） 礫 1～5 ㎜（2%）

13 暗褐色土 10YR3/3 硬い 1 住掘方埋土
明黄褐色土塊 1 ㎜～1.5 ㎝（30%） 炭化物 1 ㎜（1%） 礫 1～5 ㎜（2%）

14 黒色土 10YR2/1 1 竪穴埋土
明黄褐色土塊 1～7 ㎜（3%） 炭化物 1 ㎜（1%） 礫 1～5 ㎜（2%）

15 黒色土 10YR2/1 1 竪穴埋土
明黄褐色土塊 1 ㎜～2 ㎝（25%） 炭化物 1 ㎜（1%） 礫 1～5 ㎜（2%）

C－C′

1 盛土（埋め土）

2－1 黒褐色土 10YR2/3 耕作土（畑）または攪乱

2－2 黒色粘質土 10YR3/1 耕作土（水田） 下位に鉄分集積

2－3 黒色粘質土 7.5YR3/1 耕作土（水田） 下位に鉄分集積

2－4 黒色粘質土 10YR3/1 溝？ 締まりまし
明黄褐色土塊 1 ㎜～1 ㎝（20%）

2－5 黒褐色粘質土 10YR2/2
明黄褐色土塊 1～2 ㎜（1%） 炭化物 1～3 ㎜（3%） 礫 1～5 ㎜を少量含む

2－6 黒褐色粘質土 10YR2/2 暗渠？
明黄褐色土塊 1 ㎜～2 ㎝（25%） 炭化物 1 ㎜（1%） 礫 1 ㎜～15 ㎝を大量に含む

16 明黄褐色土 10YR6/6

第35図 遺構平面図・土層断面図（1/100）

遺物の概要　埋土から土器類の破片が20点ほど出土した。弥生時代中期後半の櫛描文（縦羽状）の施文された甕、弥生時代後期の櫛描文の施文された甕、内外面が赤色塗彩された弥生時代中期後半から後期の土器、古墳時代前期の土師器甕（Ｓ字状口縁台付甕）がある。この中に図上復元を含め、器形のうかがえるものはない。

１号竪穴状遺構

遺構の概要　１号住居址の南に重複する遺構で、東端の一部を調査した。埋土から出土した近世とみられる陶器の破片から、この時期の竪穴状遺構と考えらえる。

西側に屈曲し始める壁の形状から、平面形は方形ないし長方形と考えられる。規模は推測不可能である。確認した壁は、平面ならびに断面で高さ15cmを測り、緩やかな角度で底へ続く。底は平らである。壁下であるためか硬い面は認められなかった。埋土は締りのある黒色土で、２層に分けられた。

遺物の概要　埋土から近世とみられる陶器の破片が１点出土した。器種は不明で、外面に灰釉が施される。

２号竪穴状遺構

遺構の概要　掘削断面で遺構の存在が確認され、その後の精査で、掘削底面に埋土が僅かに残ることを確認した。埋土から近世の末頃とみられる陶器の破片が出土したため、この時期の竪穴状遺構と考えられる。

断面で確認した４箇所の壁の位置から、平面形は方形ないし長方形を呈し、南北１ｍ以上、東西2.5ｍ以上の規模を測る。断面に残る壁は、高さ10～20cmを測り、急な角度で底へ続く。埋土が所々に残っているが、底は平らにつくられているようである。また、露呈した底に硬い面は認められなかった。埋土は粘性のある黒色土である。

遺物の概要　埋土から土器類の小破片が約20点出土した。弥生時代中期後半から後期の甕または壷、古墳時代の土師器坏・壷などが主体となるが、その中に時期決定資料となった近世の陶器がある。鉢とみられる底部破片で、内面に柿釉が施され、内底面にピン痕がある。高台は付高台である。

１号土坑

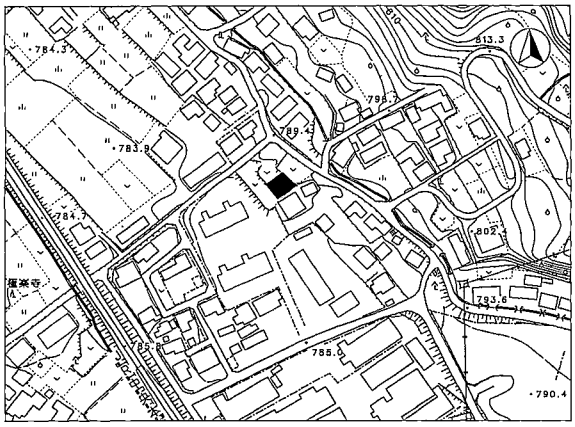
遺構の概要　掘削断面で遺構の存在を確認した。柱痕が存在するため、柱穴と考えられる。規模からみて、掘立柱建物址を構成する柱穴であろうが、共伴する柱穴は確認できていない。

柱痕が掘方の中心付近にあるならば、上面径は約65cmを測る。深さは45cmを測り、底に向かって径を減じる。埋土は３層に分けられた。柱痕は上位で28cm、下位で10cmを測り、底面に達している。

遺物の概要　埋土から古墳時代（後期？）の土師器小型壷とみられる口縁部の破片が１点出土した。

７　上原城下町遺跡

（24－７　写真図版８）



第36図　調査地点位置図（1/5,000）

遺跡番号　224

所 在 地　茅野市ちの1037－４

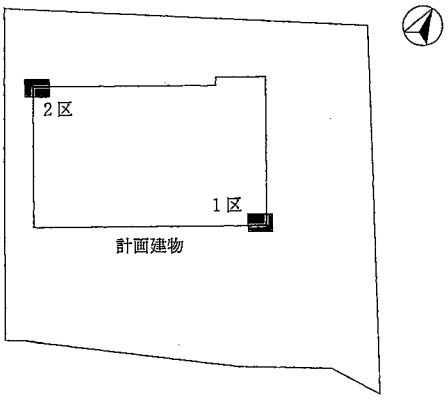
調査原因　個人住宅

調査期間　平成24年11月９日

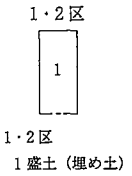
調査面積　２㎡

遺　　構　なし

遺　　物　なし



第37図　調査位置図（1/300）



第38図　土層断面図（1/40）

調査の概要　遺跡範囲の南東端、「崩壊堆積地」から「南谷」へ移行する西側斜面に、個人住宅が建築されることになった。標高は786m位である。

当該工事に伴い、地表下に掘削が及ぶ箇所は、住宅の基礎部分である。約53㎡の建物の外周を、幅75cm、地表下45cmまで掘削する計画である。

事業予定地は平成23年の遺跡確認調査後に、厚い盛土によって宅地造成された土地である（『市内遺跡６』23試－５）。基礎工事はこの盛土内で行われる可能性が高く、市教育委員会職員の立ち会いのもとで工事を進めてもらうことにした。また土層の確認ならびに記録作成に対し協力を求めた。

工事立ち会いの結果、予想どおり盛土が確認され、この土層内で掘削が止まることを確認した。これにより当該工事による遺跡への影響はないと判断した。

8　上原城下町遺跡

（24－８写真図版８～10）

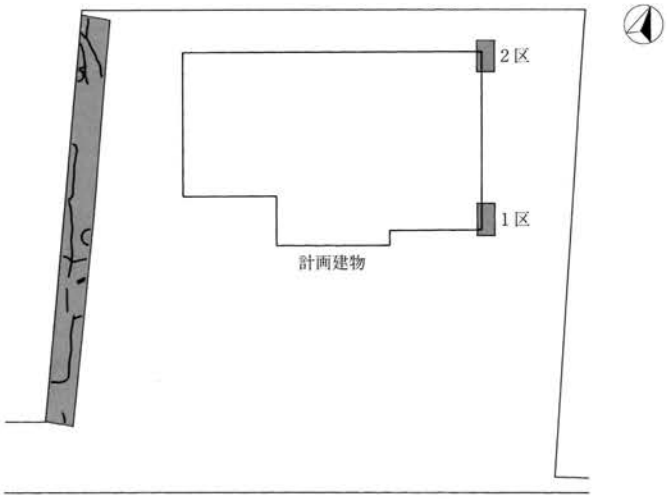
第39図　調査地点位置図（1/5,000）

遺跡番号　224
所 在 地　茅野市ちの703－２ほか
調査原因　個人住宅
調査期間　平成24年12月24日～平成25年２月４日
調査面積　23㎡
遺　　構　古墳後期ほか時期不明住居址、溝址、土坑（柱穴）など
遺　　物　弥生土器・古墳後期土師器・中世土師質土器41点、須恵器１点、黒曜石１点（1.7ｇ）

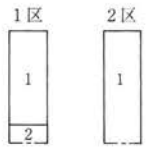
調査の概要　遺跡範囲の西側、「扇状台地」から「段丘面」に移行する西側緩斜面に、個人住宅とこれに伴う擁壁が建設されることになった。標高は771m位である。

当該工事に伴い、地表下に掘削が及ぶ箇所は、住宅と擁壁の基礎部分である。住宅の基礎は約79㎡の建物の外周を、幅70cm、地表下60cmまで掘削する計画である。一方、敷地の西側境界に設置される擁壁の基礎は、長さ約16m、幅135cm、地表下90～100cmを掘削する計画である。

事業地周辺では、近年、集合住宅や個人住宅の建築工事に伴う発掘調査等が行われ、弥生時代中期後半から平安時代の竪穴住居址が相次いで発見されている（『市内遺跡Ⅱ』試－８、『市内遺跡７』24－６）。該期



第40図　調査位置図（1/300）



第41図　土層断面図（1/40）

の集落が事業地まで広がることが予想されたが、事業地は近世以降の耕作地の造成に伴う盛土（埋め土）と、当該事業による盛土（埋め土）からなる土地であり、この盛土内で基礎工事が行われる可能性が高いと考えられた。そこで、市教育委員会職員の立ち会いのもとで工事を進めてもらうとともに、遺構が発見され、やむを得ず失われてしまう場合には、記録作成に要する時間を確保していただくよう事業者に協力を求めた。

先行する擁壁の基礎工事に立ち会ったところ、計画深度に達する前に、地山である明黄褐色土層が露呈し、その面に遺構とみられる落ち込みが多数確認された。施工業者に対し、いったん計画深度より高い位置で掘削を止めてもらうよう協力を求め、慎重に掘り下げを進めた。掘削終了後、事業者から承諾を得て掘削面を精査した結果、全域に竪穴住居址・溝址・柱穴などの遺構を確認した。

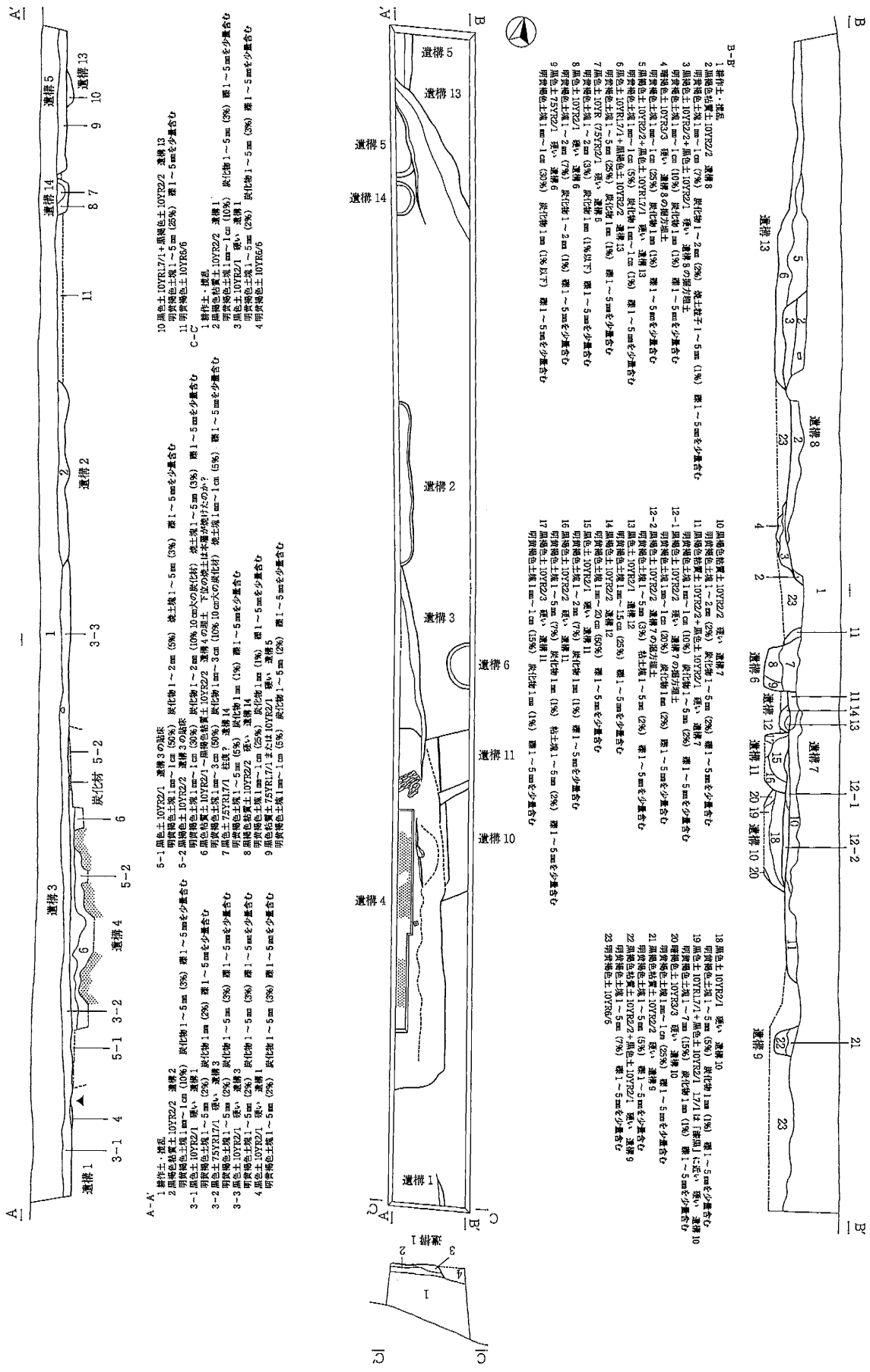
工事による掘削で遺構の大部分が失われてしまったものもあるが、事業関係者の遺跡保護に対する配慮から、多くの遺構は埋土がしっかり残る状態で検出された。しかし、計画どおり工事が進められた場合、遺構の上面はもちろん、遺構全体が削平されてしまうものも少なからず存在した。事業者と遺構の保護について協議したが、宅地面との関係から掘削深度を浅くする設計変更は不可能であった。そこで、削平される範囲を対象に発掘調査を行い、記録保存することで合意した。なお、計画深度より深く掘り込まれた箇所（遺構４・９・10の下面）については、工事用の砕石で埋め戻し、擁壁の下に現状保存することにした。

一方、住宅の基礎工事は、宅地造成時の盛土、またはその下にある造成土（耕作土）の中で止まるものであった。これにより当該基礎工事による遺跡への影響はないと判断した。

先に記したとおり、確認した遺構には、竪穴住居址（遺構３・４・７・８など）、溝址（遺構10・11）、柱穴（遺構６・９・14）としてよいものがある。その一方で、性格や範囲のはっきりしない遺構も少なくない。そのため、固有の遺構名を付すことを避け、「遺構～」で呼称することとし、調査の所見に基づいて14箇所に番号を付した。以下、竪穴住居址ならびに溝址とみられる遺構を中心に概要を報告する。

遺構１

遺構の概要　調査区の南端から、壁とこれに続く平らな面を確認した。壁（東壁）が途切れているため、遺構の広がりははっきりしないが、以下に記す２つの可能性が考えられる。１つは、西断面（第42図Ａ断面）にみられる床または底の僅かな高まり（▲）を北壁の立ち上がりと考え、これに向かって東壁が屈曲または



第42図　遺構平面図・土層断面図（1/80）

弧状に続くとする見方である。この場合、本遺構そのものが１つの遺構となり、北コーナー付近が調査区にかかったこととなる。もう１つは、確認した東壁を遺構３の東壁の一部とし、僅かな高まりを掘削時に生じた自然の高まりと考えて、遺構３とともに１つの遺構を形成するとの見方である。これが正しいとすれば、東壁が９ｍを超える超大型の竪穴住居址が存在したことになる。西断面の土層観察で、遺構１から遺構３の埋土内（▲付近）に、別の遺構であることを示す壁の立ち上がりが確認できなかったことから、後者の可能性が高いように思われる。

確認した壁は高さが15cmを測り、急な角度で床または底に続く。その面は平らで、踏み固められたのかはっきりしないが、非常に硬い状態である。カマドや柱穴などの竪穴住居址に伴う施設や掘り込みは確認できなかった。埋土は硬く締まった黒色土である。南断面で２層に分けられたが、西断面では１層であった。遺物はいっさい出土しなかった。

遺構２

遺構の概要　調査区の中程、西断面にかかり、遺構の一部を確認した。東壁の長さが2.3ｍと短いため、竪穴住居址の可能性は低いと思われる。重複する遺構３より新しい遺構である。

平面形は方形ないし長方形と考えられる。確認した壁は、平面で５cm、南断面で15cmの高さを測る。緩やかな角度で掘り込まれ、そのまま底へ続いていく。そのため、壁と底の境界がはっきりしない。これと関連するかのように、底には起伏が目立つ。明黄褐色土層中に底が設けられるため、その面は非常に硬いが、踏み固められたような状態ではない。埋土は粘性のある黒褐色土で、明黄褐色土塊を多く含む。出土遺物がなく、遺構の時期は不明である。

遺構３

遺構の概要　調査区の南半、西断面にかかり、明黄褐色土層ならびに遺構４の埋土に掘り込まれた遺構の一部を確認した。長さ４ｍを超える壁に加え、床であろう硬化した平らな面があることから、竪穴住居址と判断した。時期は出土した土器類からみて、古墳時代後期以降、平安時代までの竪穴住居址と考えられる。

明黄褐色土層面から遺構４にかけて、約4.5ｍの東壁を断続的に確認した。先に記したとおり、遺構１と同じ遺構であるならば、東壁の長さは９ｍ以上に及ぶ。また遺構１と別の遺構であるとしても、7.6ｍ以上を測ることとなる。確認した壁は、最も高い所で15cmを測り、直角に近い角度で掘り込まれる。そのために壁と床の境界は明瞭である。床は明黄褐色土層へ掘り込まれた面にあわせ、遺構４の埋土上に厚さ25cmまでの貼床（掘方埋土）を施してつくられている。全面が踏み固められとても硬いため、検出は容易であった。古墳時代後期以降の竪穴住居址と考えられるが、カマドや土坑などは確認されなかった。埋土は所により粘性を帯びる黒色土である。貼床された土は、大量の明黄褐色土塊と10cm大までの炭化物・材や焼土塊を含む黒色土および黒褐色土である。

遺物の概要　埋土から土器類の破片が10点ほど出土した。弥生時代中期後半から後期の甕または壺、古墳時代後期？の土師器（精製品）、古墳時代後期以降の須恵器甕または壺の口縁部がある。

遺構４

遺構の概要　調査区の南半、西断面にかかり、遺構の一部を確認した。工事の掘削深度より深く掘り込まれた遺構であり、上面を調査したに過ぎない。そのために構造ははっきりしないが、５ｍを測る壁を備える点から竪穴住居址と判断した。時期は出土した土器類からみて、古墳時代後期と考えられる。重複する遺構３・10・11より新しい遺構である。

平面形は方形と考えられる。東壁にカマドがあるとするならば、主軸はＮ－72°－Ｅを示すことになる。

東壁は高さが25cm以上を測り、ほぼ直角に掘り込まれている。本遺構は遺構３の床下（貼床下）に確認された遺構である。埋土の状態を確認するため、西断面下を20～30cmの幅で掘り下げたところ、遺構３の床下に黒色～黒褐色の粘質土ならびに焼土を確認した。焼土は、その位置からカマドの火床とも考えられるが、広範に及ぶこと、10cm以上の厚みがあることから、火災または住居廃絶後の火焚きなどにより生じた可能性が高いと思われる。なお、遺構３の貼床に含まれる大量の炭化物・材ならびに焼土の塊は、本来、この遺構４の埋土（焼土）に含まれていたものと考えられる。

遺物の概要　埋土（黒色～黒褐色粘質土）から土器類の破片が10点ほど出土した。弥生時代中期後半から後期の土器、古墳時代後期の可能性がある土師器甕ならびに器種不明の土師器（精製品）がある。

遺構５

遺構の概要　調査区の北半、西断面にかかり、遺構の一部を確認した。規模ははっきりしないが、推測される平面形、床とみられる平らな面、重複する遺構との新旧関係などからみて、古墳時代（後期？）の竪穴住居址と考えられる。重複する遺構13より新しい遺構である。

平面形は方形と考えられる。確認した壁は、高さが15cmを測る。急な角度で掘り込まれ、床に続く。床は明黄褐色土層に設けられるため、とても硬いが、踏み固められた箇所は認められない。また、遺構13への明確な貼床は確認できなかった。埋土は硬く締りがある黒色粘質土である。

遺物の概要　埋土から土器類の破片が２点出土した。１点は弥生時代中期後半から後期の甕または壷、もう１点は弥生時代中期後半以降、古墳時代までの土器類と考えられる。

遺構７

遺構の概要　調査区の南半、東断面（第42図Ｂ断面）で遺構の存在を確認した。構造に不明な点があるものの、埋土が南北５ｍにわたり広がる上、床と思しい平らな面が認められたため、竪穴住居址と判断した。遺物は出土しなかったが、重複する遺構との新旧関係から、弥生時代後期以降、古墳時代後期までの竪穴住居址と推測される。遺構６より古く、遺構10～12より新しい遺構である。

確認した壁は、南・北壁ともに高さが15cmを測る。緩やかな角度で掘り込まれ、床に続く。床は明黄褐色土層に掘り込まれた面にあわせ、遺構10・11の埋土の上面に厚さ10cmまでの黒褐色土を貼床してつくられる。その貼床された箇所が壁側より盛り上がっている。埋土は硬く締まった黒褐色粘質土で、２層に分けられた。壁側から流れ込む状態を示すため、自然堆積の可能性がある。

遺構８

遺構の概要　調査区の北半、東断面で遺構の存在を確認した。構造に不明な点があるものの、埋土が南北4.1ｍにわたり広がる上、床であろう硬い面が認められたため、竪穴住居址と判断した。時期は埋土から出土した土器、遺構13との新旧関係から、古墳時代（後期？）と推測される。遺構13より新しい遺構である。

確認した壁は、北壁で25cm、南壁で15cmの高さを測る。ともに緩やかな角度で掘り込まれ、床に続く。床には緩やかな起伏がみられる。全体が硬く締っているが、明黄褐色土層面をそのまま床とする中央付近が特に硬い。なお、壁側の床は、明黄褐色土層面をさらに深さ10～20cm、幅110～130cmほど掘り窪め、明黄褐色土塊を大量に含む黒褐色土や暗褐色土（第42図Ｂ断面第３・４層）を埋め戻してつくられている。埋土は明黄褐色土塊を多く含む黒褐色の粘質土で、硬く締まりがある。

遺物の概要　埋土から土器類の破片が１点出土した。古墳時代（後期？）の土師器壷（精製品）の口縁部と考えられるものである。

遺構10

遺構の概要　調査区の南半、東断面にかかり遺構の一部を確認した。計画深度より深く掘り込まれているため、上面を調査したに過ぎないが、推測される断面形ならびに平面形から、溝址と考えられる。時期は、出土した土器と重複する遺構との新旧関係から、弥生時代中期後半から後期と推測される。遺構３・４・７・11と重複し、すべての遺構に切られている。

北東－南西方向に掘削され、断面形が「Ｕ」字形を呈する。幅は140cm以上、深さは25cm以上を測る。埋土は３層に分けられた。壁際に堆積した暗褐色土を、明黄褐色土塊を含む硬く締まった黒色土がレンズ状に覆う。埋土に砂礫やシルトなどが含まれていない点から、水路以外の溝址と考えられる。

遺物の概要　埋土から弥生時代中期後半から後期の土器片が３点出土した。

遺構11

遺構の概要　調査区の南半、東断面にかかり遺構の一部を確認した。計画深度より深く掘り込まれているため、上面を調査したに過ぎないが、推測される断面形ならびに平面形から、溝址と考えられる。時期は、出土した土器と重複する遺構との新旧関係から、弥生時代中期後半から後期と推測される。遺構３・４・７より古く、遺構10より新しい遺構である。

重複する遺構10と平行して、北東－南西方向に掘削される。断面形は「Ｕ」字形もしくは「Ｖ」字形と考えられる。幅は70cm、深さは35cm以上を測る。埋土は３層に分けられた。壁際に堆積した黒褐色土を、明黄褐色土塊を含む硬く締まった黒色土がレンズ状に覆う。遺構10と同様に、埋土に砂礫やシルトなどが含まれていない点から、水路以外の溝址と考えられる。

遺物の概要　埋土から土器類の破片が４点出土した。いずれも弥生時代中期後半から後期の壺または甕である。その中の１点に櫛描文の施文された後期とみられる甕の破片がある。

遺構13

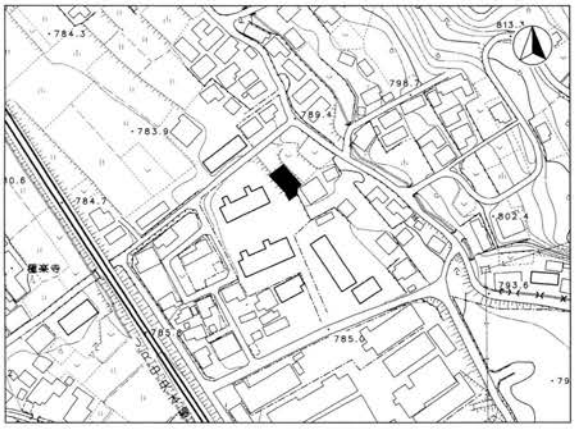
遺構の概要　調査区の北半で遺構の一部を確認した。本遺構の底面は床状に掘り込まれた北側の平坦面に対し、南側が溝状に掘り窪められている。遺構８と同じつくりの竪穴住居址と考えられる一方、北側平坦面と地山の境、ならびに分層された埋土の層界（第42図Ｂ断面第５層と第６層の境）が床と判断できる状態でないことから、段掘りされた溝址の可能性もある。時期は出土した土器と重複する遺構との新旧関係から、弥生時代中期後半から後期と推測される。遺構５・８と重複し、これに切られている。

断面および平面によると、本遺構は北東方向に1.5m以上、北西から南東方向に５m以上の広がりをもつ。底面に20～25cmの段があり、この南側が深さ40cm、北側が深さ15cmを測る。調査区に対し遺構が斜めにかかるためか、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は２層に分けられた。黒色土と黒褐色（粘質）土の混在土で、下位層に明黄褐色土塊が大量に含まれる。なお、溝址であるとしても、埋土に砂礫やシルトなどが含まれていない点から、水路以外の溝址と考えられる。

遺物の概要　埋土から土器類の破片が１点、黒曜石の剥片が１点出土した。土器類は、部位が頸部で、「く」の字に屈曲する可能性が高い。色調・胎土・調整からは、弥生時代中期後半から後期の土器としてよいものであるが、当地域の該期の土器にこのような頸部の形状を示すものは極めて少ない。したがって、古墳時代の壺の可能性が高いように思われる。

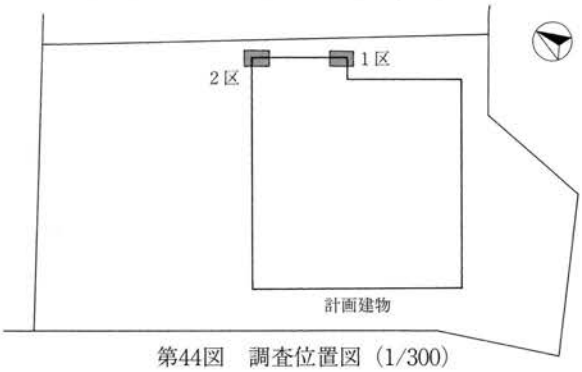
9　上原城下町遺跡

（24－9　写真図版10・11）

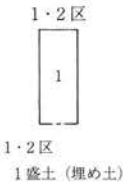


第43図　調査地点位置図（1/5,000）

遺跡番号　224
所 在 地　茅野市ちの1037－3
調査原因　個人住宅
調査期間　平成25年2月6日
調査面積　2㎡
遺　　構　なし
遺　　物　なし



第44図　調査位置図（1/300）



第45図　土層断面図（1/40）

調査の概要　遺跡範囲の南東端、「崩壊堆積地」から「南谷」へ移行する西側斜面に、個人住宅が建築されることになった。標高は786m位である。

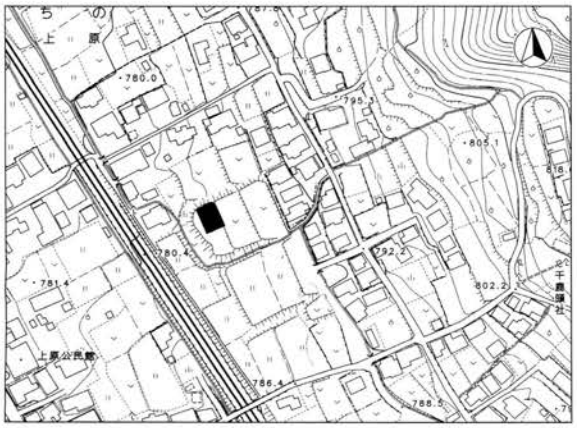
当該工事に伴い、地表下に掘削が及ぶ箇所は、住宅の基礎部分である。約72㎡の建物の外周を、幅65cm、地表下50cmまで掘削する計画である。

事業予定地は平成23年の確認調査後に、厚い盛土によって宅地造成された土地である（『市内遺跡6』23試－5）。基礎工事はこの盛土内で行われる可能性が高く、市教育委員会職員の立ち会いのもとで工事を進めてもらうことにした。また土層の確認ならびに記録作成に対し協力を求めた。

工事立ち会いの結果、予想どおり盛土が確認され、この土層内で掘削が止まることを確認した。これにより当該工事による遺跡への影響はないと判断した。

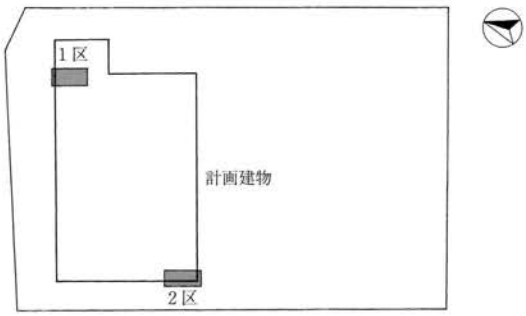
10　上原城下町遺跡

（24－10　写真図版11）

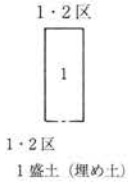


第46図　調査地点位置図（1/5,000）

遺跡番号　224
所 在 地　茅野市ちの1221－12
調査原因　個人住宅
調査期間　平成25年3月14日
調査面積　2㎡
遺　　構　なし
遺　　物　なし



第47図　調査位置図（1/300）



第48図　土層断面図（1/40）

調査の概要　遺跡範囲の中央付近、「扇状台地」頂部の西側斜面に、個人住宅が建築されることになった。標高は782m位である。

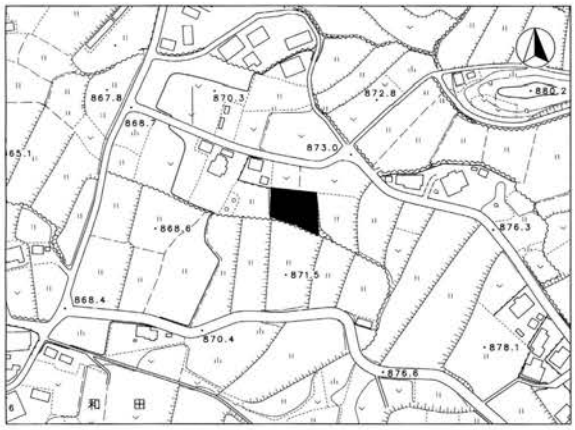
当該工事に伴い、地表下に掘削が及ぶ箇所は、住宅の基礎部分である。約44㎡の建物の外周を、幅70cm、地表下50cmまで掘削する計画である。

事業予定地は平成20年の確認調査後に、盛土によって宅地造成された土地である（『市内遺跡Ⅲ』試－７）。基礎工事はこの盛土内で行われる可能性が高く、市教育委員会職員の立ち会いのもとで工事を進めてもらうことにした。また土層の確認ならびに記録作成に対し協力を求めた。

工事立ち会いの結果、予想どおり盛土が確認され、この土層内で掘削が止まることを確認した。これにより当該工事による遺跡への影響はないと判断した。

11　中島遺跡

（24－11　写真図版11・12）



第49図　調査地点位置図（1/5,000）

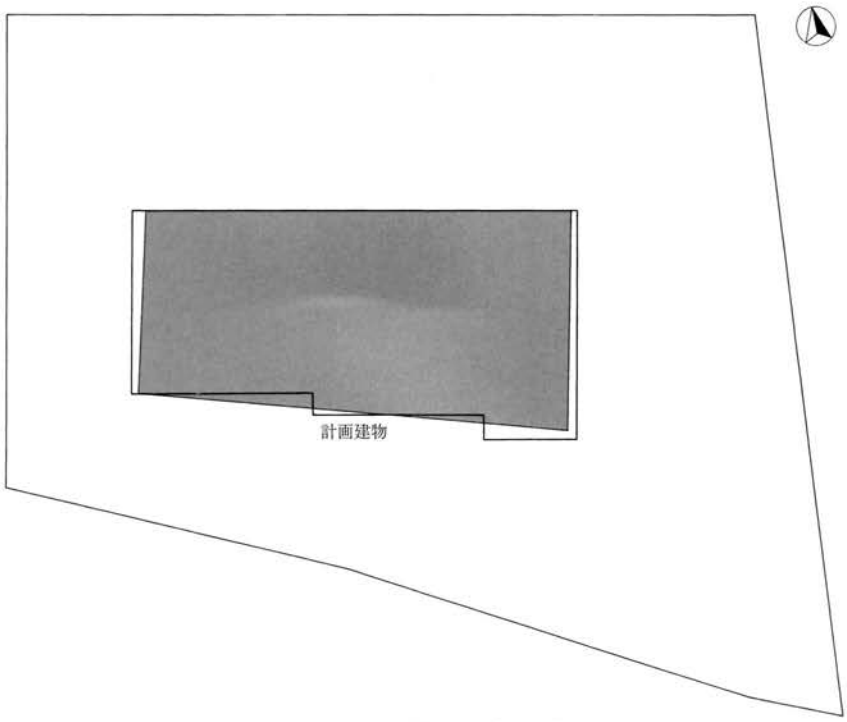
遺跡番号　246
所 在 地　茅野市玉川1358
調査原因　個人住宅
調査期間　平成24年８月21日～23日
調査面積　140㎡
遺　　構　なし
遺　　物　縄文土器、黒曜石製石鏃、打製石斧、黒曜石（原石・剥片・砕片・両極打撃痕のある石片など140点、131.8ｇ）整理箱１

遺跡の概要　八ヶ岳の西麓に島状に突き出た小泉山（1,069m）。その西麓に東西に長い２つの台地があり、これに挟まれた谷中の微高地に本遺跡は立地する。地籍は玉川地区粟沢である。遺跡の面積は約10,000㎡、遺跡内の標高は874～870mを測る。

本遺跡は北側台地にある茅野和田遺跡、南側台地にある和田日向遺跡と並び、大正時代から知られた縄文時代の遺跡であるが、近年までその実体は不明であった。

平成17年、微高地の南側緩斜面に個人住宅が建築されることとなり、本遺跡初の本格的な発掘調査が行われた。縄文時代（後・晩期？）と考えられる８本柱で構成された亀甲形の掘立柱建物址が発見されたほか、八ヶ岳西麓から見つかることの稀な縄文時代晩期とみられる浅鉢の口縁部破片が撹乱層から出土した（『市内遺跡Ⅰ』17－20）。また、平安時代の遺物も出土し、当時代の遺物散布地であることも確認された。

調査の概要　遺跡の中央付近、微高地の南側緩斜面に個人住宅が建築されることになった。標高は872m位



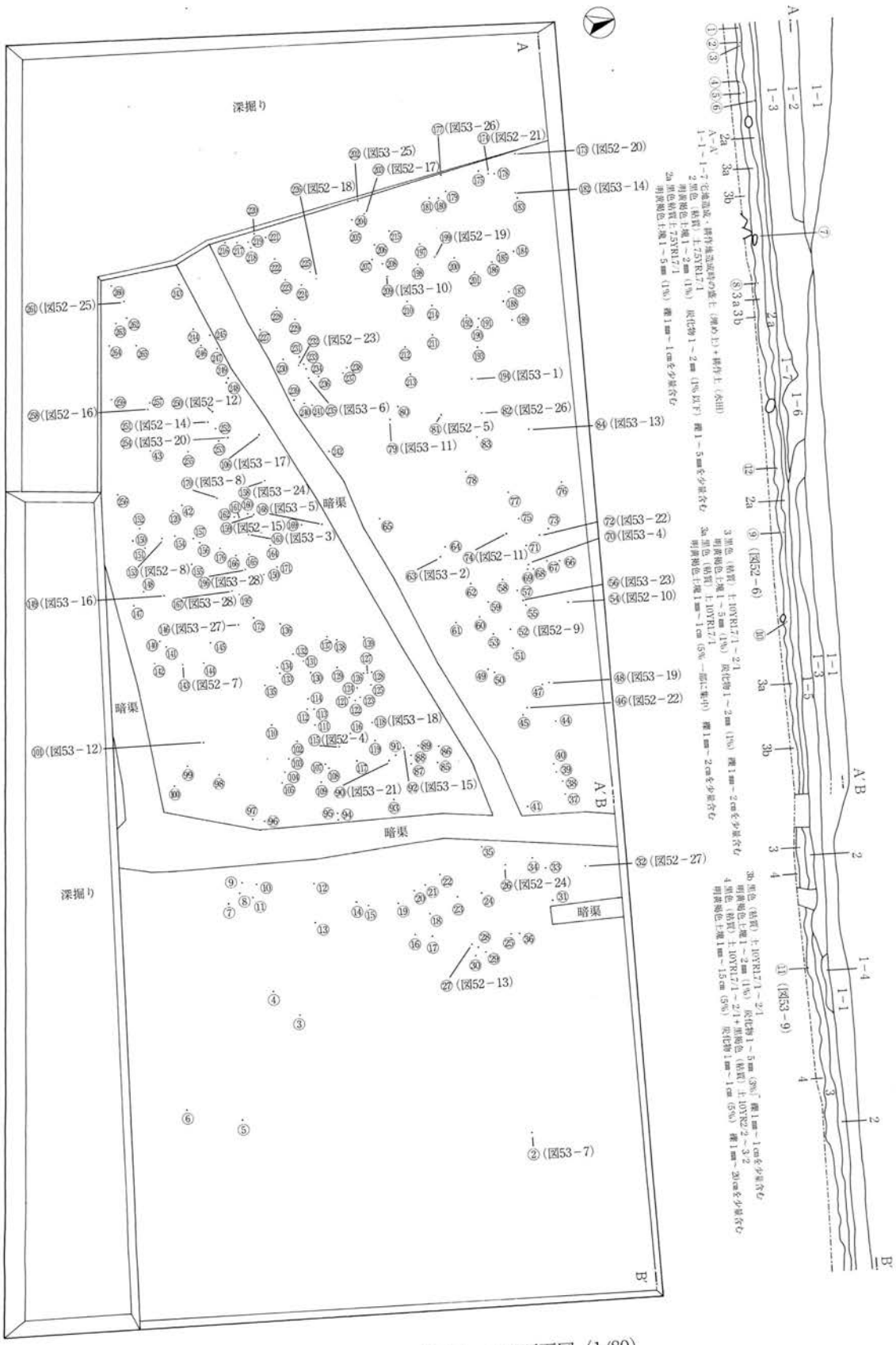
第50図　調査位置図（1/300）

である。

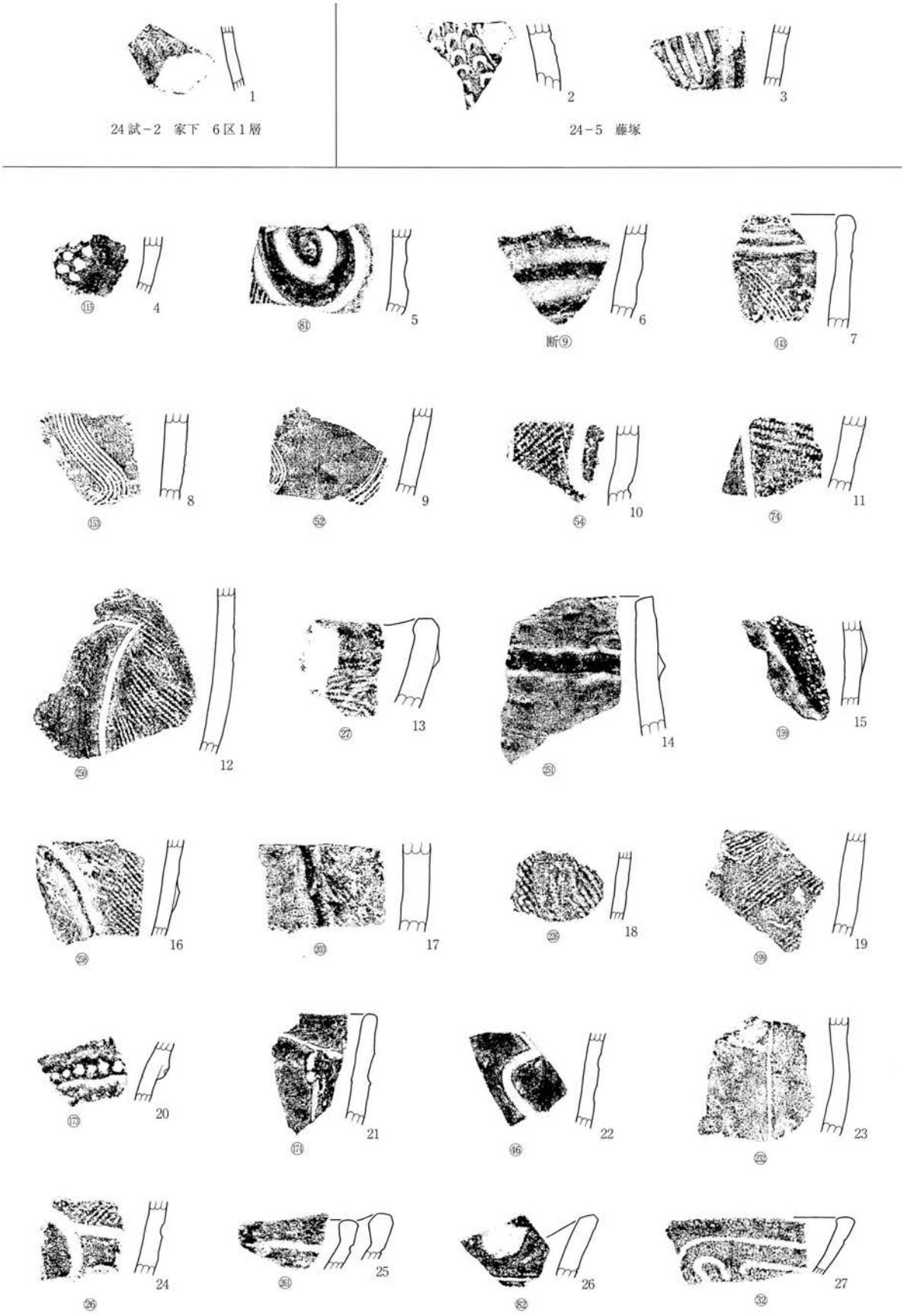
当該工事に伴い、地表下に掘削が及ぶ箇所は、約127㎡の建物の基礎部分である。しかし、地下水位の高い軟弱な土地であるため、基礎工事に先立ち、地表下150～250㎝の地盤補強工事（表層改良）が計画されていた。

事業地では、平成23年に擁壁設置工事に伴う確認調査が行われ、耕作土層から縄文土器や黒曜石製石器（石鏃未製品？）が出土した（『市内遺跡６』23－11）。また、先に記したように、西側隣接地の調査によって、縄文時代とみられる掘立柱建物址が発見されている。こうした事業地ならびに周辺における調査の状況から、事業地下に何らかの遺構が存在するものとみて、地盤補強工事の前に発掘調査を行うことにした。

0.28㎡級のバックホーで慎重に掘り下げを進めたところ、宅地造成時の盛土（埋め土）、および耕作土層（水田）の下に、縄文土器や黒曜石等を含む黒色土層を確認した。重機による掘削はこの土層の上面までとし、作業員を投入して、以下の土層を人力で掘り下げることにした。黒色土層は色調と粘性の微妙な違いから、数層（第51図第２～４層群）に分けられ、第２・３層群に縄文時代中期後半曽利Ⅳ式から後期前半堀之内式までの土器片、黒曜石（７：砕片、102：原石　20.8ｇ）、打製石器（13：打製石斧の刃部、154・打製石斧の基部、230：打製石斧の基部）などが含まれていた。縄文土器は５㎝大までのものが大半を占め、大きなものでも10㎝を超えることはない。縁辺を中心に磨滅が認められ、中には変色したもの、脆い状態のものも認められる。こうした土器の遺存状態に加え、砂礫（砂利）が一定量含まれる点から、遺物包含層は水と関わりのある場所に形成された堆積層と考えられる。その形成要因として、① 調査区付近を小河川が流れ、ここに微高地から遺物が投棄された、② 洪水等によって遺物を含む黒色土が上方（北東方向）から運ばれてきた、③「水さらし場状遺構」などの生活領域が広がっていたなどが考えられるが、これを明らかにすることはできなかった。なお、遺物包含層の下（第４層上位）に、微細な黒曜石片の出土を認めたが、出水に阻まれて十分な調査ができなかった。遺物の位置と高さを記録するとともに、調査区北側の土層断面図を作成し調査を終了した。

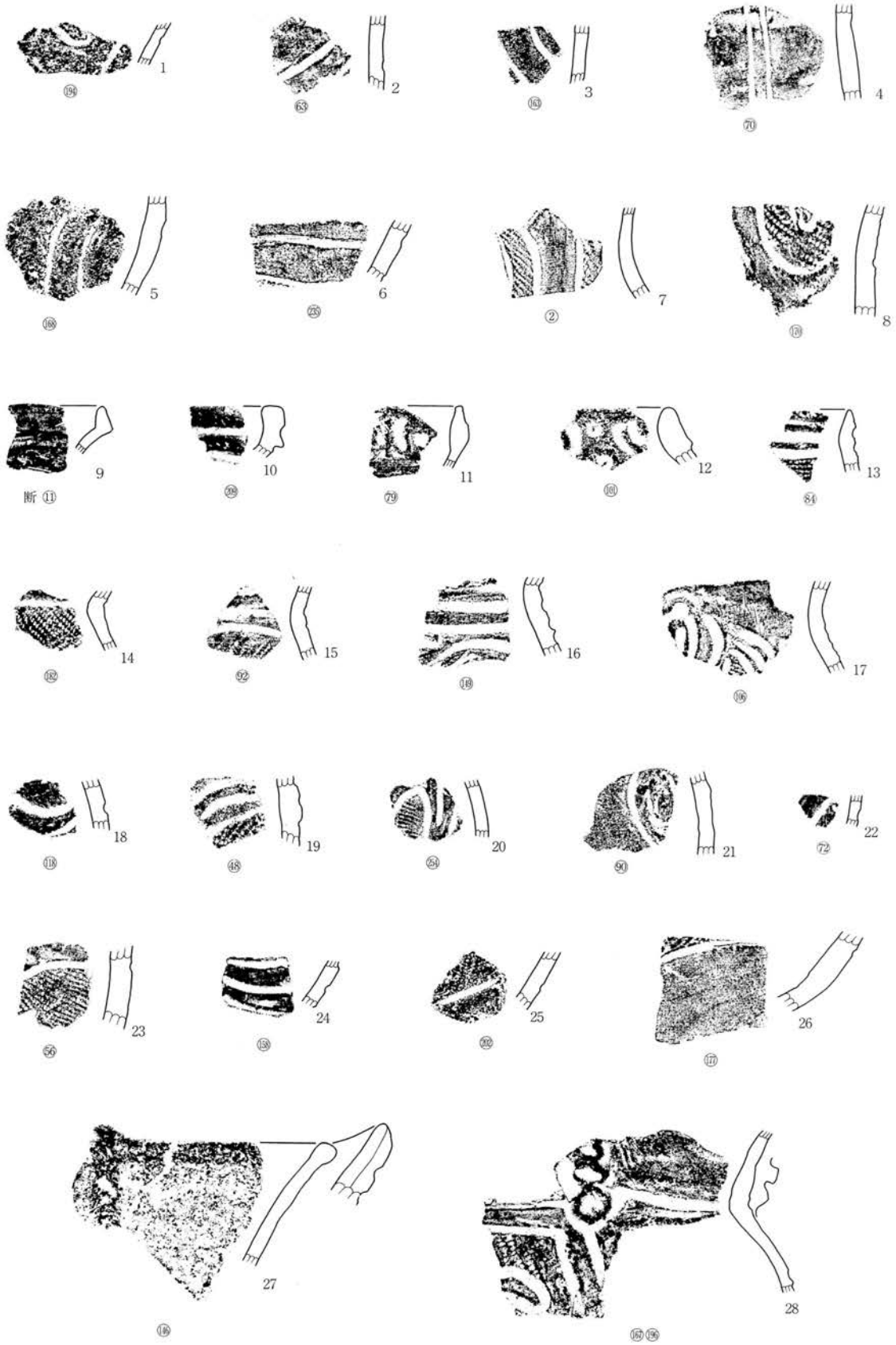


第51図　出土遺物平面図・土層断面図（1/80）



24－12　中島

第52図　出土土器（1）（1/3）

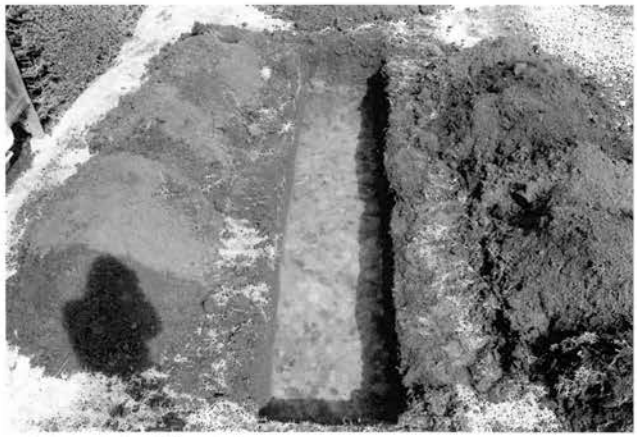


24—12　中島

第53図　出土土器（2）（1/3）

23試-1　山田畑遺跡　(1)　調査区現況　(北東から)

(2)　2区　(北から)

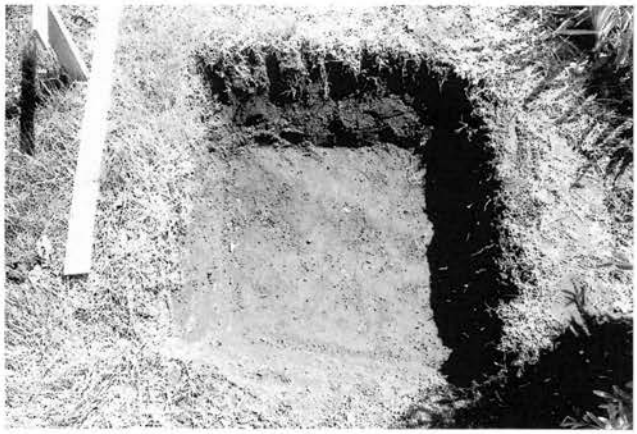


(3)　6区　(南から)

(4)　調査区全景　(南から)

(5)　調査状況　(南西から)

24試-1　家下遺跡　(1)　調査区現況　(北西から)



(2)　2区　(南西から)

(3)　6区　(南東から)

図版２

(4)　調査区（４区付近）近景　（南から）

(5)　調査区（５・６区付近）近景　（南東から）

24試-2　御社宮司遺跡　(1)　調査区現況　（北から）

(2)　２区土層断面　（北東から）

(3)　３区土層断面　（北東から）

(4)　調査状況　（北から）

24試-3　上原城下町遺跡　(1)　調査区現況　（南東から）

(2)　１区　（南東から）

(3)　１区土層断面　（南から）

(4)　２区　（南から）

(5)　調査区全景　（南東から）

(6)　調査状況　（北西から）

23-1　上原城下町遺跡　(1)　調査区状況　（南東から）

(2)　１区　（北東から）

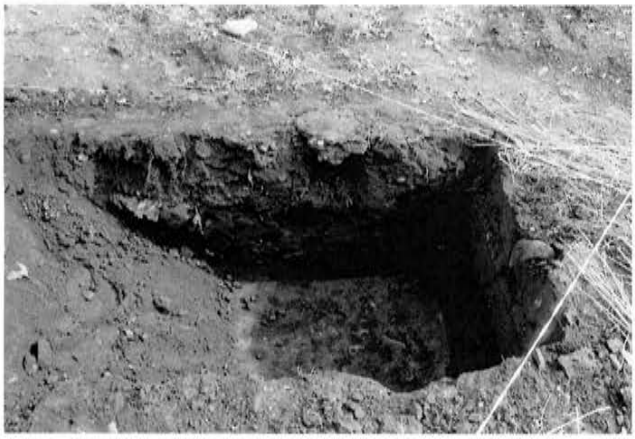
(3)　２区　（北東から）

(4)　調査区全景　（南東から）

図版４

24-1　家下遺跡　(1)　調査区状況　（南東から）

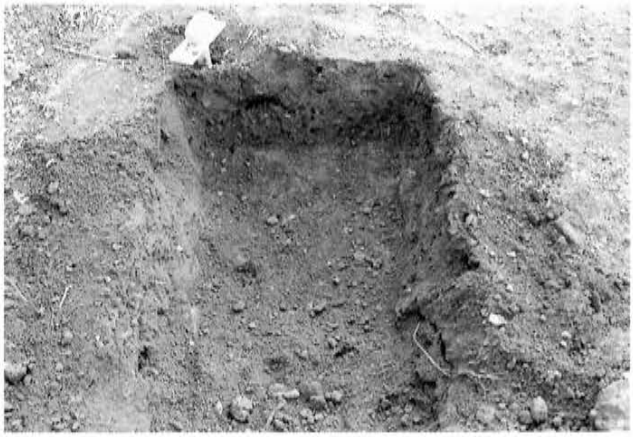
(2)　１区　（南東から）



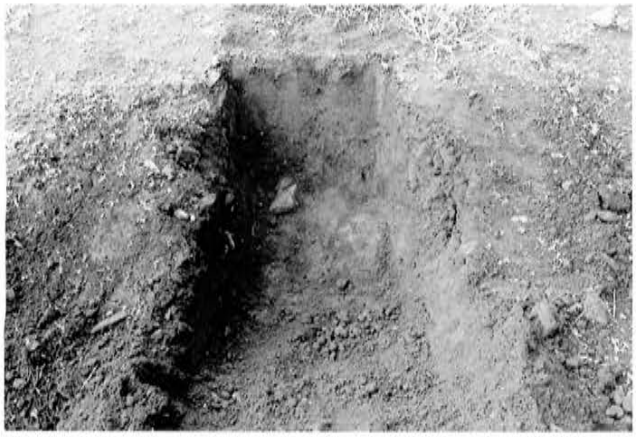
(3)　２区　（南西から）

(4)　調査区全景　（南東から）

24-2　御社宮司遺跡　(1)　調査区状況　（南から）

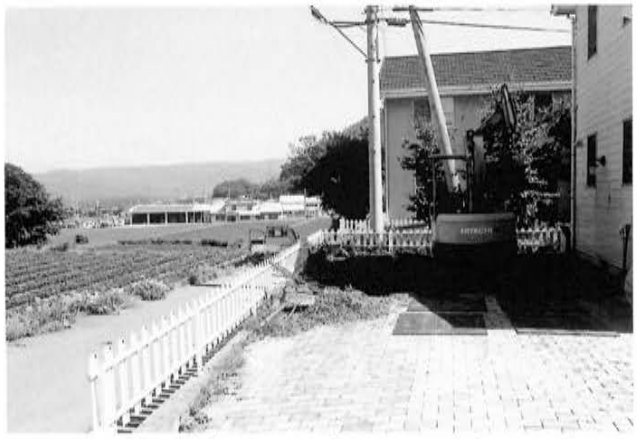


(2)　１区　（南西から）



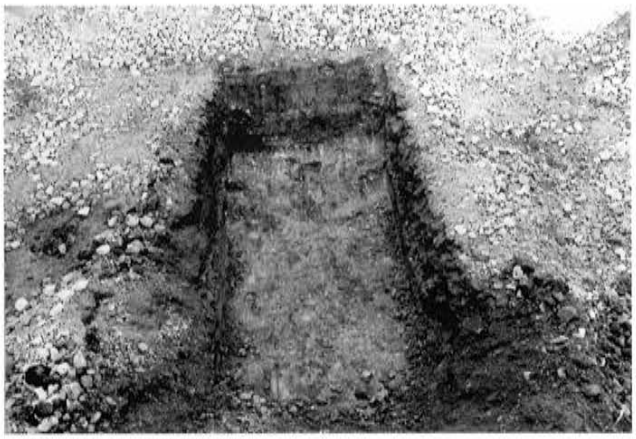
(3)　２区　（北東から）

(4)　調査区全景　（南から）



24-3　小堂見遺跡　(1)　調査区現況　（南西から）

(2)　１区　（北西から）



(3)　２区　（北東から）

(4)　調査区全景　（南西から）

24-4　藤塚遺跡　(1)　調査区現況　（南から）

(2)　調査区現況　（北から）

(3)　擁壁基礎土層断面　（北西から）

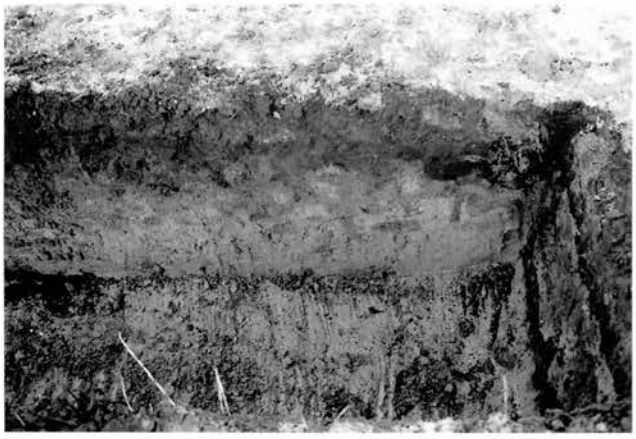
(4)　擁壁基礎①　（西から）

(5) 擁壁基礎② （東から）

(6) 住宅基礎 （南西から）

(7) 調査状況 （北から）

24-5 一本木遺跡 (1) 調査区現況 （東から）



(2) 住宅基礎東端土層断面 （南西から）

(3) 住宅基礎北辺土層断面 （東から）

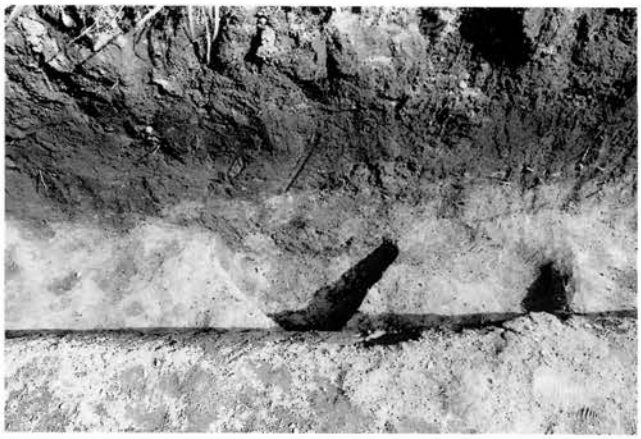
(4) 住宅基礎東辺土層 （南西から）

(5) 調査区全景 （東から）

24-6　上原城下町遺跡　(1)　調査区現況　（南から）

(2)　１号住居址　（北から）

(3)　１号住居址・１号土坑土層断面　（北西から）

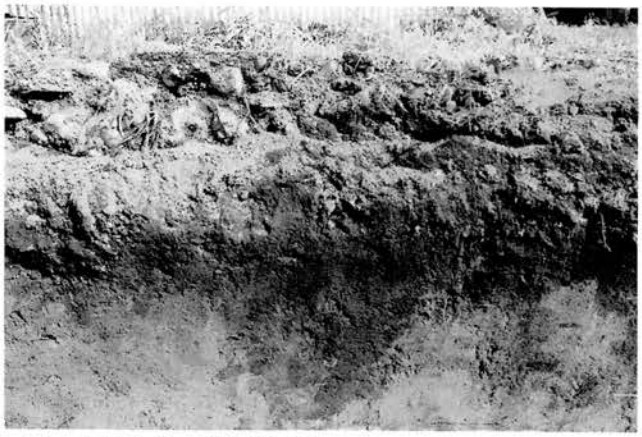


(4)　１号住居址Ｐ１　（北西から）

(5)　１号住居址Ｐ２　（北西から）

(1)　１号竪穴状遺構　（北東から）

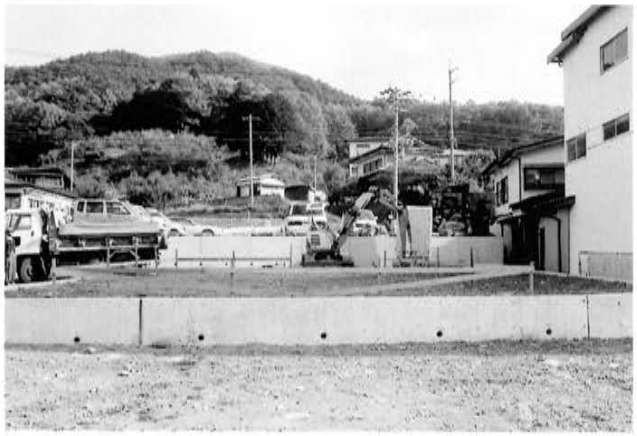
(1)　２号竪穴状遺構　（東から）



(2)　１号土坑　（北西から）

(3)　調査区全景　（南から）

(4)　調査状況　（南東から）

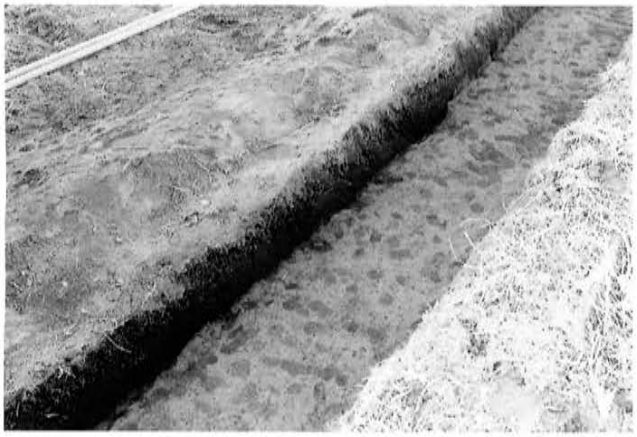


24-7　上原城下町遺跡　(1)　調査区現況　（南東から）

(2)　２区　（南東から）

(3)　調査区全景　（南東から）

24-8　上原城下町遺跡　(1)　調査区（擁壁）現況　（南から）



(2)　遺構２　（南東から）

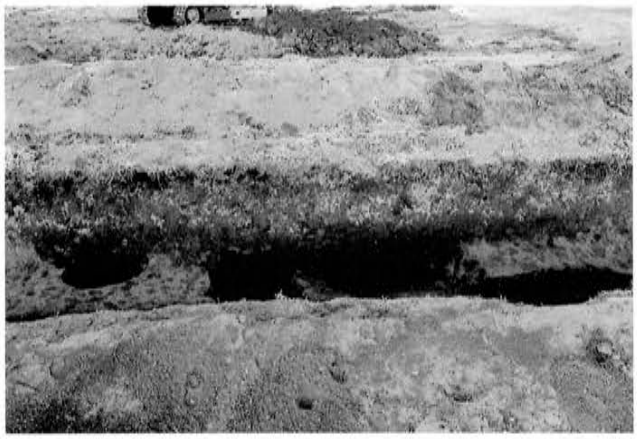
(3)　遺構３・４土層断面①　（北東から）

(4)　遺構３・４土層断面②　（北東から）

(5)　遺構３・４土層断面③　（北東から）

(6)　遺構４　（北東から）

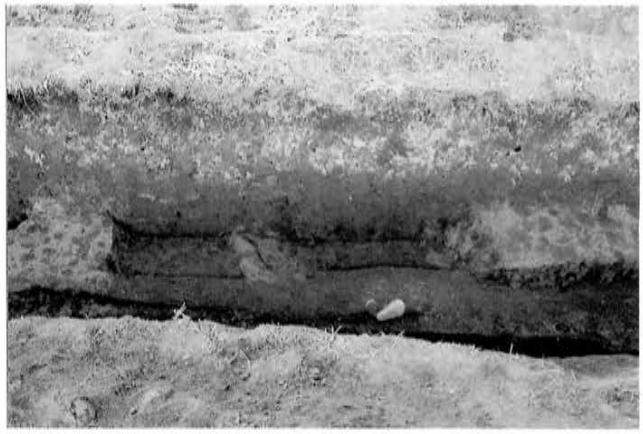
(7)　遺構６ほか土層断面　（南から）



(8)　遺構７ほか土層断面　（南西から）

(9)　遺構８ほか土層断面　（南西から）

(10)　遺構９土層断面　（南西から）



(11)　遺構10・11ほか土層断面　（南西から）

⑿　遺構13検出状態　（南東から）

⒀　遺構５・13・14　（南東から）

⒁　遺構13土層断面　（南西から）

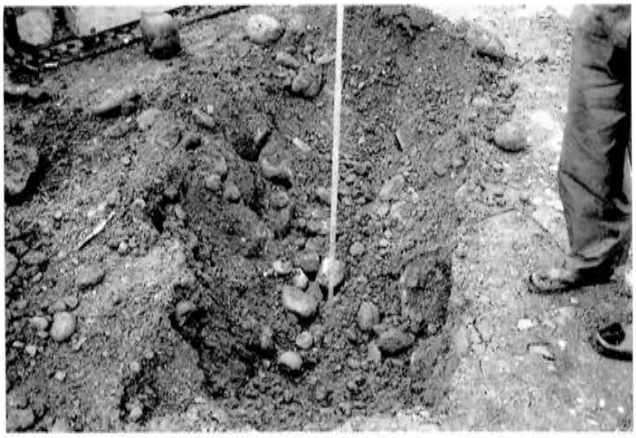
⒂　調査区（擁壁）近景　（南東から）

⒃　調査状況　（北西から）

⒄　調査区（住宅）全景　（東から）

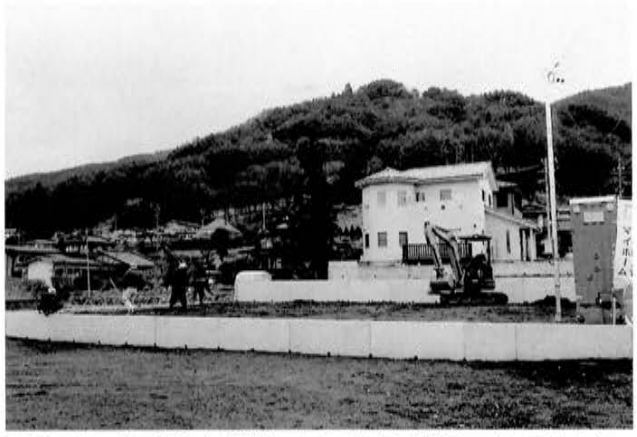
⒅　１区　（北東から）

24-9　上原城下町遺跡　(1)　調査区現況　（北から）

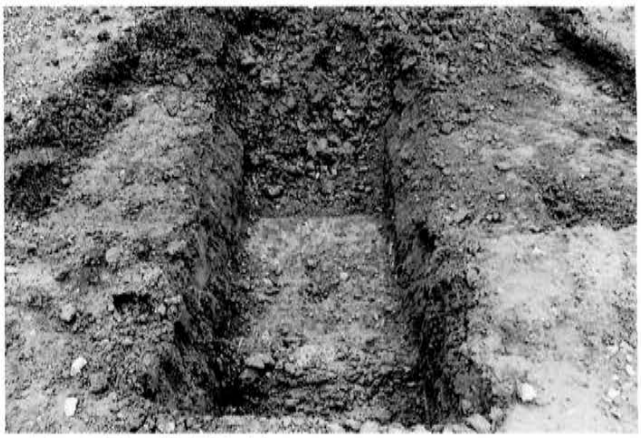


(2)　1区　(北西から)

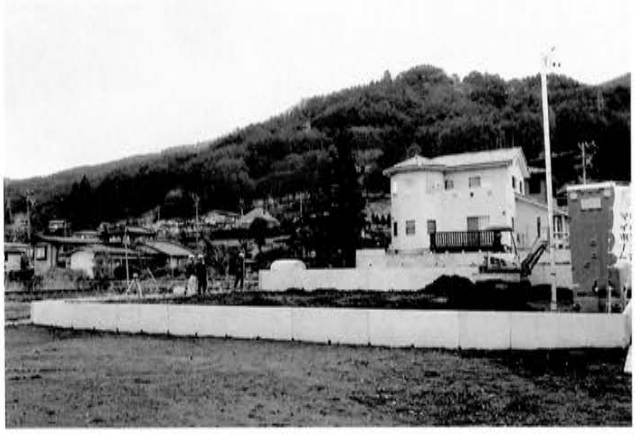
(3)　調査区全景　(北から)



24-10　上原城下町遺跡　(1)　調査区現況　(南西から)



(2)　1区　(北西から)



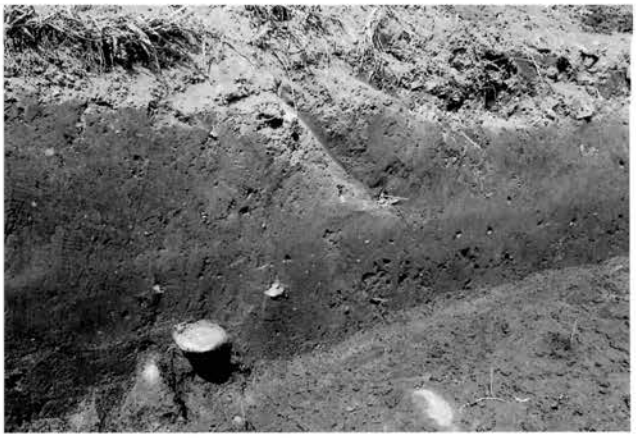
(3)　調査区全景　(南西から)

24-11　中島遺跡　(1)　調査区現況(南東から)

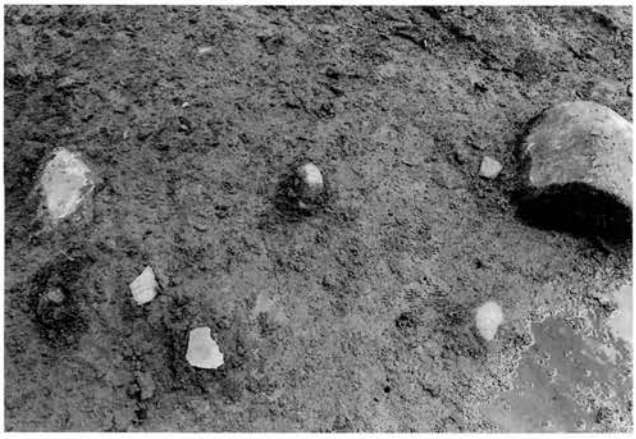
(2)　遺物出土状態①　(西から)

(3)　東側遺物出土状態　(南から)

(4) 西側遺物出土状態 （南から）



(5) 遺物包含層ほか土層断面 （南西から）

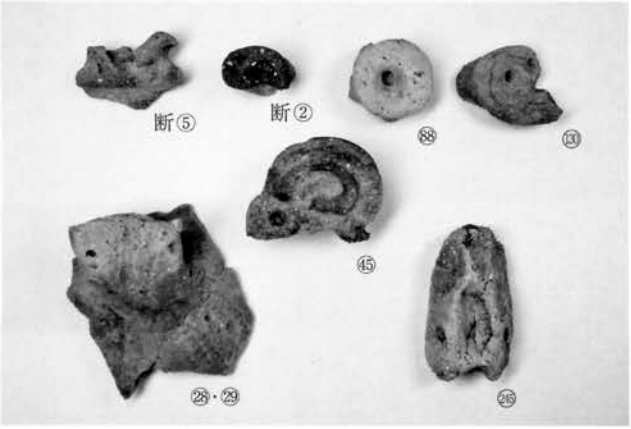


(6) 土器出土状態 （北西から）

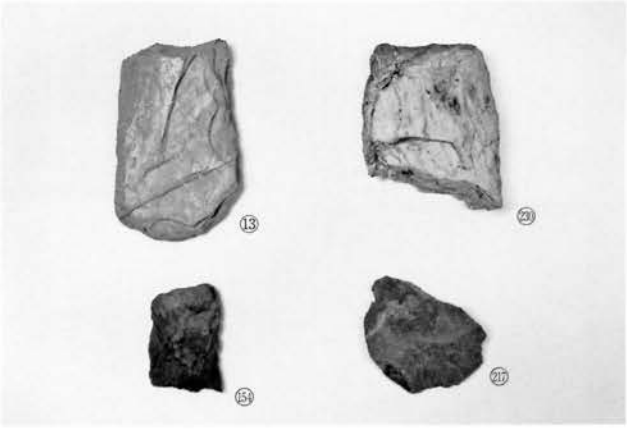
(6) 調査区全景 （東から）

(7) 調査区西側深掘り （東から）

(8) 調査状況 （西から）



(9) 出土遺物①



(10) 出土遺物②

報告書抄録

ふりがな	しないいせきなな
書　　名	市内遺跡７
副 書 名	平成23・24年度 埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	小池岳史
編 集 機 関	茅野市教育委員会
所 在 地	〒391-8501　長野県茅野市塚原二丁目６番地１号　℡0266-72-2101
発行年月日	西暦2014年３月28日

ふりがな 遺跡名	所在地	市町村コード 遺跡番号	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因	発見遺構 発見遺物
やまだはたけ 山田畑	茅野市玉川 3350-9	20214 245	平成24年 ３月７日	30	道路	
いえした 家下	茅野市ちの 2574-1ほか	20214 110	平成24年 ７月11日	6	宅地造成	弥生土器・古墳土師器
みしゃぐうじ 御社宮司	茅野市宮川 5865-3	20214 143	平成24年 10月10日～15日	8	集合住宅	
うえはらじょうかまち 上原城下町	茅野市ちの 1222-1ほか	20214 224	平成24年 ８月29日～30日	8	宅地造成	中世土師質土器、近世陶器
うえはらじょうかまち 上原城下町	茅野市ちの 1768	20214 224	平成24年 ３月28日	1	個人住宅	
いえした 家下	茅野市ちの 285-4	20214 110	平成24年 ９月25日	2	個人住宅	
みしゃぐうじ 御社宮司	茅野市宮川 5858-3	20214 143	平成24年 10月２日	2	個人住宅	
こどうみ 小堂見	茅野市玉川 3240-3	20214 160	平成24年 ７月26日	5	個人住宅	
ふじづか 藤塚	茅野市玉川 3580-1	20214 162	平成24年 ４月12日～５月14日	37	個人住宅	縄文土器、黒曜石
いっぽんき 一本木	茅野市玉川 8428-1の一部	20214 163	平成24年 11月27日	46	個人住宅	
うえはらじょうかまち 上原城下町	茅野市ちの 697-2ほか	20214 224	平成24年 ７月27日～８月21日	42	個人住宅	古墳後期住居址、竪穴状遺構、土坑 弥生土器・古墳土師器・中世土師質土器、近世陶器
うえはらじょうかまち 上原城下町	茅野市ちの 1037-4	20214 224	平成24年 11月９日	2	個人住宅	
うえはらじょうかまち 上原城下町	茅野市ちの 703-2ほか	20214 224	平成24年　平成25年 12月24日～２月４日	23	個人住宅	古墳後期住居址、溝址、土坑など 弥生土器・古墳土師器・中世土師質土器、須恵器、黒曜石
うえはらじょうかまち 上原城下町	茅野市ちの 1037-3	20214 224	平成25年 ２月６日	2	個人住宅	
うえはらじょうかまち 上原城下町	茅野市ちの 1221-12	20214 224	平成25年 ３月14日	2	個人住宅	
なかじま 中島	茅野市玉川 1358ほか	20214 246	平成24年 ８月21日～23日	140	個人住宅	縄文土器、黒曜石製石鏃、打製石斧、黒曜石

市 内 遺 跡 7

――平成23・24年度 埋蔵文化財発掘調査報告書――

平成26年３月25日　印刷
平成26年３月28日　発行

編集　茅野市教育委員会
発行　長野県茅野市塚原二丁目６番地１号（0266）72－2101㈹
印刷　永明社印刷所
　　長野県茅野市塚原二丁目12番地30号